

学術情報センター ニュース

第 17 号目次

- 創立 5 周年記念講演会を開催…………… 2
- NACSISの国際サービスの
発展に向けて…………… 4
- 英国図書館長及び研究開発部長来訪…………… 7
- ソウル大学図書館からの訪問調査…………… 8
- インターネット・バックボーンの
運用に向けて…………… 9
- 《研究開発》
- ILLシステムの機能拡張のための
平成 3 年度（前期）開発項目…………… 11
- 民間等との共同研究「学術雑誌全文デー
タベースのためのSGML方式による投
稿・編集システムの研究…………… 12
- 国際研究ネットワーク調整会議
CCIRN ……………… 14
- 図書館と情報サービスにおける新しい
フロンティアに関する国際会議…………… 15
- 日本における国際書誌調整第 9 回
公開講演会…………… 18
- 第 3 回日本情報国際会議および
ICSTI（国際科学技術情報協議会）
シンポジウム…………… 19
- EXIRPTS（研究情報の国際交換に
関する専門者会合）第 9 回会議
（オタワ市）…………… 22
- 学術情報流通に関わる標準化動向調査…………… 24
- CJK-JRG：漢字コードに関する
国際会議…………… 26
- 《NACSISサービス案内》
- 学術情報ネットワークの拡充整備と
これに伴う運用停止のお知らせ…………… 28
- メインシステム機種更新作業に伴う
サービス休止の予定…………… 30
- 大学等の研究者等提供データベースの
サービス開始…………… 30
- 国立国会図書館作成データベースの
導入…………… 31
- 経済学文献索引データベースの
サービス開始…………… 32
- 東京大学史料編さん所『維新史料綱要
データベース』のサービス開始…………… 33
- 海外研究プロジェクトデータベースの
本体データ請求サービスの一部開始…………… 34
- 民間助成研究成果概要データベースの
サービス開始…………… 36
- MathSciデータベースの更新…………… 37
- 国内、国外で開催が予定されている
学会の情報を更新（NACSIS-BBS）…………… 37
- NACSIS-BBS掲示板一覧…………… 38
- データベース概要紹介リーフレットの
発行…………… 40
- 利用料金参照機能のサービス開始…………… 42
- 接続ニュース…………… 43
- NACSIS-IR利用者懇談会の実施…………… 44
- NACSISサービスQ & A（3）…………… 45
- NACSIS-IRシステム・データベース
収納状況…………… 51
- NACSIS-CATデータベース構築状況…………… 52
- 《教育・研修》
- 研修事業前半期を終えて
—受講者アンケートより…………… 53
- 平成 3 年度学術情報センター・
シンポジウム開催のお知らせ…………… 55
- 第 11 回「東アジア文字データの国際交換に
関する実証研究公開講演会」の開催…………… 56
- 《その他》
- 平成 3 年度前期会議等報告…………… 57
- 学術情報センター「私立大学図書館協会
総大会・研究会関連展示会」に出展…………… 59
- 人事異動…………… 59
- 学術情報センター日誌…………… 60

創立5周年記念講演会を開催

学術情報センターは、昭和61年4月に東京大学文献情報センターを転換拡充し、大学共同利用機関として設置されてから今年で5年が経過した。このため、創立5周年を記念し将来の飛躍に向う契機とするため平成3年6月19日（水）午後1時30分から上野公園内にある東京国立博物館大講堂において「文化としての学術情報」をメインテーマとして、学術情報センター創立5周年記念講演会を開催した。

講演会の開会にあたり、猪瀬 博学術情報センター所長から挨拶として、学術情報センターの生い立ちと現状の紹介の後、文部省当局、参与、評議員、及び運営協議員などの諸先生からの心のこもった御指導と大学図書館を始め、多くの関連機関からの暖かい御支援に対し謝辞が述べられた。

引き続き、講演会に移り、演者のそれぞれ専門的立場から貴重で高邁な講演があり、約200人の聴衆が熱心に耳を傾けた。

講演内容については、後日、三田出版会から刊行される予定。



岡本 道雄先生



後藤 英一先生



西田 龍雄先生

— 次 第 —

「転換期における技術と科学」

（財）国際高等研究所所長

岡 本 道 雄 先 生

「超高速計算機—テラフロップスマシン」

前東京大学大型計算機センター長

後 藤 英 一 先 生

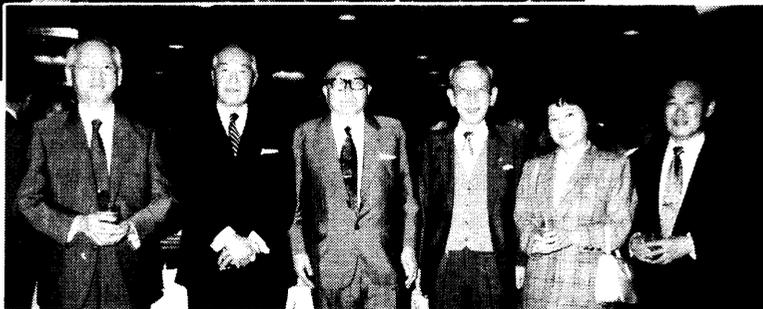
「文字学と東アジア世界」

京都大学付属図書館長

西 田 龍 雄 先 生

講演会終了後、会場を上野精養軒に移して記念パーティーを開催した。記念パーティーでは猪瀬 博 学術情報センター 所長から感謝の挨拶が述べられ、長谷川善一 文部省 学術国際局長が祝辞として、学術情報センターの経緯と思い出話が披露され、天城 勲 文部省顧問の発声で乾杯が行われ満5歳を祝った。

パーティーには、参与、評議員、運営協議員、文部省、大学共同利用機関、大学図書館、全国共同利用大型計算機センターおよび学術情報センターOB等、学術情報センターに深くかかわりのあった関係者約100名が出席し、思い出話しに花をさかせ終始和やかに懇談が行われた。



NACSIS の国際サービスの 発展に向けて

学術情報センター 副所長
国際展開ワーキンググループ主査

おお の きみ お
大 野 公 男

学術情報に国境はない。学術情報の国際的流通を促進して、学術研究の進歩・発展に貢献するのは、学術情報センター（NACSIS）の主要な任務の一つと考える。ここに述べる NACSIS サービスの国際展開のいくつかの可能性は、NACSIS 内に設けられたワーキング・グループによって検討された、現在の時点における、いわば NACSIS の願望である。その実現の為に、予算や制度上の裏付けを当然必要とする。また、国際的な事業の展開は、その性質上、展開の相手となる機関、地域、あるいは国との bilateral な取り組みとなる。従って、国際展開を成功させるためには、相手側の種々異なる諸条件との整合をできる限り取ることが肝要である。

A. NACSIS-CAT（目録・所在情報サービス）

A 1. 欧州

現在、BL（英国図書館）を連絡・調整機関として、BLNET から JANET（英国学術ネットワーク）を介し、5 図書館（BL および Cambridge, Oxford, Sheffield, Stirling の各大学）が、所蔵する日本語資料の総合目録作成のために、NACSIS と接続し、オンラインによる NACSIS-CAT の試行を行なっている。このパイロットプロジェクトの報告書は、1992年3月を目途として、作成される予定である。評価できる結果が生まれれば、まず英国内の他大学に参加の途を開くことが検討の対象となる。その場合には、日本語端末、CAT 用 UIP の入手、BL までの通信料金の負担などが参加のための条件となる。

さらに、諸条件が整えば、欧州大陸の研究図書館にも同様なサービスを行なうことが考えられる。

A 2. 北米

北米では、書誌ユティリティが発達し、外国にも進出していることが大きな特徴である。

アメリカについては、学術雑誌総合目録と文編へのアメリカからの入力、あるいは、その北米版の作成が考えられる。こういう協力がきっかけとなって、ILL システムの相互利用など文献の利用が円滑になることが期待される。将来的には、OCLC, RLIN などと NACSIS-CAT とのシステム間リンクの可能性が大きくなろう。この実現には、先方との協議と共に、相当量のシステム開発を伴うので、できるだけ早い時期に検討を始めることとしたい。

A 3. 東アジア

中国・韓国においては、国立中央図書館を中心に、それぞれ CHINA-MARC, KORMARC を作成中である。また、図書館ネットワークを作ろうという各種の試みが進行中で、NACSIS は、NACSIS-CAT のノウハウをできるだけ伝えることによって、これらの試みに協力するのが当面は適切であろう。

B. NACSIS-IR (情報検索サービス)

B 1. MT 形態での頒布

MT の頒布については、広報に努め、頒布希望に積極的に対応してゆく。

B 2. 代行検索

現在、NSF (米国国立科学財団)、LC (米国議会図書館)、BL において、試行的に実施している代行検索サービスは当面これを維持し、そのサービス・メニューの増加を図る。また適当な相手機関があれば、代行検索を実施する海外提携機関を拡大する。ただし、新たに専用回線を設置するには相当の時間を要するであろうから、当面は国際公衆網を利用することとなろう。その際の通信料、端末機器設置等の費用は、原則として先方機関の負担とする。相手機関としては、公的性格を持つものを考え、1 国に 1 ~ 2 機関とするのが適当であろう。

B 3. 海外提供本格化に向けてのシステム開発

本格的な海外提供にあたっては、海外のエンド・ユーザーからの直接アクセスの実現および利用料金徴収が解決すべき大きな課題となる。その対策としては、ゲートウェイ接続と海外エージェントとの提携が考えられる。このためのシステム開発や運用体制の整備には時日を要するので、早期の方針策定が必要である。

- 1) ゲートウェイ接続：自動ログオン型接続を考える。この接続は海外エンド・ユーザーによる NACSIS-IR への直接アクセスを実現する方法として有力である。ただし、提携する海外機関がゲートウェイ・システムを用意する必要がある。これを双方向 ALLIANCE 型の接続方式にすれば、海外システム上のデータベースを NACSIS-IR を通じて日本国内からアクセスでき、国内ユーザーへのサービス向上にもなる。また本センターが大学共同利用機関、大型計算機センター等の国内関係機関の海外へのゲートウェイ機能を持てば、これら機関の所有するデータベースの効率的な海外へのサービスが実現できよう。
- 2) 海外エージェントとの提携：これが実現すれば、直接アクセス方式で、かつエージェント所属利用者の使用料金の一括清算ができる。当面、海外の代行検索実施機関などで、このような業務が可能かどうか調査することになろう。

C. NACSIS-MAIL (電子メール・サービス)

現在、NACSIS-MAIL は、米国内で、CSNET および BITNET と接続し、MAIL の交換を可能としている。今後は、海外の CCITT X.400 (MHS) との接続を推進する。その理由は、欧米において国際標準採用の動きが始まっていること、および NACSIS の事業展開には国際標準を用いるという方針があるからである。この場合、各国の実装規約あるいは実現システムにおける機能レベルに相違があることが考えられるので、その差異を吸収するゲートウェイの開発が必要になろう。

D. 学術情報ネットワーク

学術情報の円滑な生産と流通を実現するために構築が進められている学術情報システムの中で、学術情報ネットワークはその物理的な基盤通信網として位置づけられている。学術情報ネットワークは、国際標準であるパケット交換方式を採用し、国内においては、NACSISのサービスを提供するためだけではなく、種々の仮想ネットワークを学術情報ネットワークの上にも実現している。すなわち、高エネルギー物理、宇宙科学、地球物理、核融合、医療情報など研究分野ごとの、異なる運用方法をもつ、ネットワークである。一方、学術情報ネットワークの海外への拡張も計画され、NSFならびにBLとの間に国際回線が設けられている。利用者から寄せられている要望の主な点は次の通りである：1) 回線速度の増強、2) TCP/IPのためのネットワークの整備、3) 接続範囲の拡大。

ネットワークの技術革新と実用化のスピードは、急速であるため、現状の把握と将来的な動向を見通すことが、適切なネットワークの拡張を図っていく上で極めて重要である。

D 1. 米国との接続

国際研究ネットワークの相互接続の一環として、米国内の基幹ネットワークとの接続のための国際回線を増強する。

D 2. 欧州との接続

国際研究ネットワークの相互接続のため必要な対応を図るとともに、現在行なわれている共同プロジェクトの成果を反映させたネットワーク接続を検討していく。

D 3. アジア諸国との接続

アジア諸国との接続にあたって、アジア／大洋州地域に対するNACSISの役割について、議論を進めていく。

NACSISサービスの“本格的”国際展開とは、相互互惠の原則に基づき、経費面でも相互の負担能力を考慮に入れて適正に分担しつつ、ネットワーク、IR、CAT等のサービスを相手国の学術研究者のニーズに応じて提供すると同時に、日本の研究者のニーズに応じて海外から学術情報が入手できるようになった時に、初めて実現する。“本格的”国際展開の実現のためには、いくつかの段階があるであろうし、相当の時日を要するに違いないが、NACSISとしては、とりあえずここで述べたいいくつかの可能性の実現に向かって、前進して行きたいと考えている。

英国図書館館長及び研究開発部長来訪



英国図書館は、学術情報センターと国際回線によって接続されており、NACSIS のデータベースサービスを提供するとともに、Oxford, Cambridge, Sheffield, Stirling の各大学図書館が参加し、NACSIS-CAT を試用して、英国内の日本語学術資料の総合目録作成を目的とするパイロット・プロジェクトの英国側での中心的機関である。

その館長である Saunders-Watson 氏が、5月14日に、ブリティッシュ・カウンシルの Clarke, 西田両女史を伴って学術情報センターを訪問して、猪瀬所長と懇談した。

また、7月1日には同館の研究開発部長 Perry 氏が来訪された。同氏はパイロット・プロジェクトの英国側連絡責任者であり、また国際関係担当の部長もしておられる。猪瀬所長を始めセンター側から、プロジェクト関係者8名が出席して、種々打ち合わせを行った。大学 LAN-JANET-BLNET-NACSIS の接続に手間取って、進行は予定より3月ほど遅



れているが、報告書は予定通り1992年3月末を目指して作成することになった。ちょうど Oxford 大学から NACSIS-CAT 接続成功の報が入り、明るい見通しがたった上での打ち合わせであった。

ソウル大学図書館からの訪問調査

韓国ソウル大学では、図書館自動化システムのプロジェクトを発足させ、現在、開発のための調査活動を精力的に進めている。この図書館システムはソウル大学だけではなく他の大学図書館でも採用され、これらの図書館はコンピュータネットワークによって接続される構想になっている。



この調査の一環として、学術情報センターにも来訪された。

第一陣は、4月24、25日の両日にわたり、ソウル大学図書館収書課長の柳東烈氏（Ryu Dong-ryeol）、同閲覧課司書官の具注書氏（Ku Ju-suo）他3名の計5名の一行が来所され、NACSIS-CAT、NACSIS-IRの各サービスのデモンストレーションを見学後、大野副所長、山田研究開発部長、井上研究主幹、内藤教授と懇談した。

第二陣は、ソウル大学電算科学科助教授の韓相榮博士（Han Sang-young）、同図書館電算室朴宰赫氏（Park Jae-hyeok）、同朴賢雨氏（Park Hyun-woo）、及び梨花女子大学図書館学科崔錫斗教授（Choi Sog-doo）の4名で、7月1日から5日間、学術情報センターで見学、調査をされた。初日に山田研究開発部長から学術情報センターの概要の説明を受けた後、浅野教授からネットワーク構築、整備に関して、宮澤教授から目録システムの開発について、根岸教授からはデータベース作成と情報検索について、学術情報センターでの具体的な経験を交えた詳細な説明を受けられた。また、井上教授、内藤教授、小山助教授とは、それぞれ、図書館システムの構築、書誌調整、検索システム等の諸問題について懇談した。

また、目録システム、情報検索のデモンストレーションでは、終始、活発な質問をされ、



関心の強さと理解の深さを示された。後日談として、一度聞いたことは二度聞き返さないという信念の下に、宿舎に戻ってから連日午前1時、2時まで討論とレポート作成をされたということである。

インターネット・バックボーンの運用に向けて

学術情報センター教授

あさ の しょういちろう
浅野 正一郎

1. はじめに

全国の大学で、ローカル・エリア・ネットワーク (LAN) の導入が急速に進んでいる。このような LAN の多くが採用している通信プロトコルは、TCP / IP (Transmission Control Protocol / Internet Protocol) と呼ばれているものである。TCP / IP は1983年1月から米国の ARPA ネットワークで使用を開始したプロトコルであり、当時普及が始められていた LAN を相互に接続するためのプロトコルである IP を備えていることを特徴としていた。その後、多くのワークステーションに採用される UNIX の標準通信プロトコルとして位置づけられ、世界的に普及している。現在も TCP / IP の標準プロトコルの開発は続けられており、特にネットワーク運用や新たな応用のためのプロトコル検討が IETF (International Engineering Task Force) という組織で行われている。学術情報センターでは、昭和61年度からネットワークの建設を開始しており、現在は全国に拡大し、28カ所に交換機を配置し、通称学術情報ネットワークとして、我が国の学術研究のための基幹通信網としてのパケット通信網を運用するに至っている。更にネットワークは米国と英国にまで拡張され、それぞれの代表的な学術研究ネットワークと接続している。

このパケット通信網を介して TCP / IP により LAN を相互接続することが可能であり、70の LAN が既に加わっている。しかし、パケット通信網は TCP / IP の通信のための基幹通信網としては必ずしも向いていない。例えば、TCP / IP による会話的な応用のためには転送遅延時間が低いことが望まれるが、パケット通信網の負荷が高まるとこれを保証することが困難となる。一方パケット通信網は全国の図書館を結ぶオンライン業務等にも使用されており、このための通信性能も確保しておく必要がある。

これらを勘案して、今後増大が見込まれる TCP / IP による LAN 間通信のために、新たに専用の基幹網を構成し、運用することが妥当と判断された。この新たな通信網は「インターネット・バックボーン」と称し、SINET と略称することになっている。

2. 当面のネットワーク構成

平成3年12月から試験運用を開始する SINET は、北海道大学、東北大学、筑波大学、東京大学、名古屋大学、京都大学、大阪大学、九州大学ならびに学術情報センターの9カ所に IP ルータと呼ぶネットワーク・ノード装置を配置し、これらを128Kb/s ないし256Kb/s の回線で接続するものである。通信回線はパケット通信網と共用するため、学術情報センターを中心とするスター構成となる。中心の学術情報センターのネットワーク・ノードにはネットワーク監視機能が置かれ、各大学のノードの運用を監視できる。運用に当たっては、大学の協力を得ることが必要であり、また初期には TCP / IP の運用経験がある研究者の協力を仰ぐことも求められている。このため、学術情報センターでは、インタ

ーネット研究会およびインターネット・バックボーン運用連絡会を設け、ネットワークの構成の運用の調整を行うこととし、本年7月にそれぞれ第一回の会議をもった。SINETは、これらの体制で運用されるが、現時点では平成4年4月からドメイン名称を sinet.ad とするネットワークとして、正式な運用に入るよう計画している。

3. SINET への加入の考え方

インターネット・バックボーンへ直接加入する地理的条件にある大学は、ノード装置に併設しているイーサネットに IP ルータ装置を設置し、同時にアクセスのための通信回線と必要なモデム等を調達願うことになる。即ち、標準的な直接加入に際しては、IP ルータ対（ノードに設置するものと大学内に設置するもの）、回線、必要となるモデム等の購入・借料の経費等を負担願うことになる。また加入に当たっては、学術情報センターに予め計画と機器構成を通知されることを願う。これにより SINET 上のアドレスの割当（両方のルータのアドレス）を学術情報センターが行い、また必要な用意をする。一方ノードの大学との協議も願う。ルータ等必要な機器の設置場所の確保、通信回線の設置のための手配、必要となる設置条件に関する協議等がその代表的内容となる。これらはノード大学ごとに条件が異なることが予想されるので、それにも留意頂きたい。

直接バックボーンに加入することが困難な状況にある大学は、学術情報センターが運用しているパケット通信網を介してバックボーンに加入していただく。学術情報センターが設置するノードのルータがパケット通信網経由の通信を制御するため、この場合はノードにルータを設置する負担はない。即ち、パケット通信網経由の加入に当たっては、大学側に設置するルータを用意する必要があり、またパケット通信網に加入する申請と加入に必要な通信回線の手配が必要であり、後者は通常のパケット通信網の加入に準じて扱うことになる。また、加入に当たっては、学術情報センターに予め通知されたい。

このいずれの場合にも、インターネット・バックボーンの運用に必要なソフトウェアが加入者が調達するルータに実装されることが必要となる。これらは確定次第、案内することを予定している。また、加入受付等に関する問い合わせは、学術情報センター事業部システム管理課ネットワーク係に願う。

4. 今後の展開

現在、TCP/IPに関するネットワークとして、高エネルギー物理学研究所・宇宙科学研究所等が運用または計画しているものがあり、一方 WIDE プロジェクト（代表者 慶応大学 村井 純助教授）が運用している WIDE インターネット等がある。これらのネットワークとの相互調整を同時に開始している。

また、文部省科学研究費補助金により学術情報ネットワークを介した LAN 間接続の研究が行われている。学術情報センターとしては、研究のためにパケット通信網を利用する支援は継続していくものの、LAN 間接続を日常の研究のための手段として使用する時には、SINET に統合されていくものと考えている。

長期的には、高速化への要望が高まっている学術研究ネットワークのあり方に関して研究開発を進めて行くことが重要と判断している。欧米で行われている次世代研究ネットワークの開発研究と並行して、学術情報センターでも研究が開始されている。

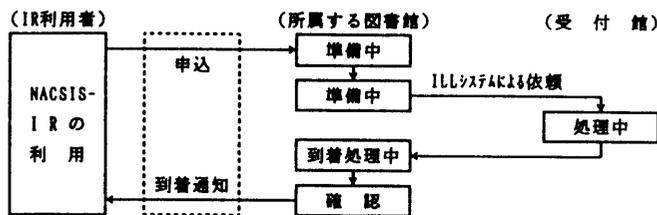
ILL システムの機能拡張のための 平成3年度（前期）開発項目

1. 平成3年度開発項目

ILL システムの基本機能部分については、既に開発を終了し来年4月からのサービス開始を目指して現在学術情報センター内でテストを行っているが、一方、拡張的な機能である NACSIS-IR からの申込機能とパソコン対応システムの2点については今年度開発する予定となっている。ここでは今年度前期の開発項目である NACSIS-IR からの申込機能について概要を紹介する。

2. NACSIS-IR からの申込機能

- ① NACSIS-IR の検索中に必要な文献をコマンドで指定することで ILL の申込が可能。
- ② この場合、申込情報は研究者の所属機関の図書館に送られるので、図書館は ILL システムを利用して所蔵館を検索し依頼先を選択して依頼する。
- ③ IR 利用者は処理状況を参照することができる。
- ④ NACSIS-IR でヒットしなかった文献についても申込ができる。
- ⑤ 申込情報として、IR の書誌事項（雑誌名・巻号・論文タイトル等）と IR 利用者の情報（利用者 ID・氏名・所属・身分）があり、それ以外にコメントも伝達できる。



3. 図書館等での運用について

学内利用者から上記のように電子的な手段による ILL の申込を図書館等で受け付ける場合、学内利用者と図書館等との間で運用上の留意事項等についての申し合わせをすることが望ましいであろう。

なお、学内利用者から NACSIS-IR からの申込があっても運用体制上応じることができない場合には、システムの NACSIS-IR からの申込を受付ないようにすることもできる。

4. 今後の日程について

これまで大学図書館協議会等の全国総会レベルでの説明を行ってきたが、今後は各種の研修会等において ILL 担当者への説明を行う予定にしている。また、今秋11月には目録システム接続館のご協力を得てモニターを実施する予定となっている。さらに、来年1月には ILL システムに関する地域説明会を全国7会場で開催する予定である。

（専門・電子情報係）

民間等との共同研究「学術雑誌全文データベースのための SGML方式による投稿・編集システムの研究」

学術情報センター教授

ね ぎし まさ みつ
根 岸 正 光

先に本センター・ニュース第15号において紹介したとおり¹⁾、学術情報センターでは、学術論文の全文データベース化を促進するため、これに関連する研究開発を進めている。本稿では、そのひとつとして平成2年度に実施された民間等との共同研究(区分A)「学術雑誌全文データベースのためのSGML方式による投稿・編集システムの研究」の結果について報告する。

この研究は凸版印刷株式会社との共同研究として行われたもので、その目的は既報のとおり、全文データベース作成のための国際規格SGML(Standard Generalized Markup Language)²⁾適用して、学術論文の入稿から編集・データベース化・模擬的学会誌印刷の過程をひとわたり実験してみるところにある。データベースの応用としては、論文全文のCD-ROMを作成する。なお、既報のとおり、この研究には図書館情報大の石塚、長谷部両助教授の協力を得た。

この研究の工程はつぎのようである

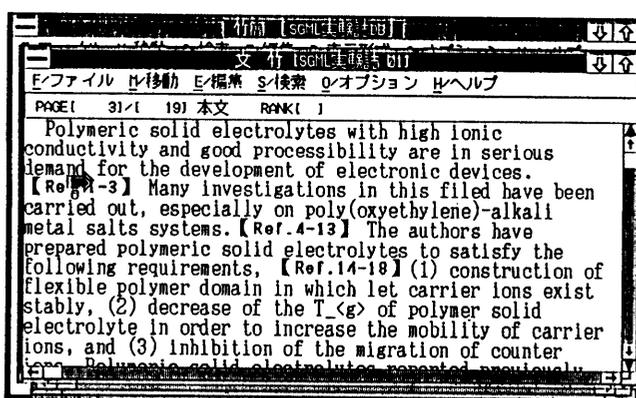
- (1) 各種学会誌における論文の要素、スタイルの分析
- (2) 学術論文(和文・英文)のためのSGMLデータ定義(DTD: Data Type Definition)の設計
- (3) 学術情報センター「学術論文データベース」からの試験用論文データの複写(一部論文は原学会誌から新たにパンチ入力)
- (4) 試験用論文のSGML形式への変換(上記DTDに即したタグの挿入)
- (5) SGML形式から実験誌印刷形式(Texによる)への変換仕様設計
- (6) スキャナーによる図表等の入力
- (7) TeXによる実験誌の印刷
- (8) CD-ROMにおける検索仕様の設計およびSGML形式からの変換
- (9) 検索ソフトウェアの開発とCD-ROMの作成

上記(3)において、著者・学会の了解のもとにこの実験データベースに入力された論文は、学術情報センターの「学術論文データベース」から複写して変換したもの7件(高分子学会和文論文、英文論文各1件、日本農芸化学会英文1件、日本薬学会英文2件、電子情報通信学会英文2件)、原学会誌からパンチ入力したもの2件(電子情報通信学会和文1件、情報処理学会和文1件)、著者保有の原稿ファイルを借用したもの1件(情報処理学会英文)の計10論文である。

(7)において印刷された模擬的学会誌「SGML実験誌」は、A4版80ページとなった。図版等は、スキャナー入力して電子的に割付けており、いわゆる貼り込みなどのない完全な電子出版になっている。何分とも実験であるので、変換・編集時の単純ミスを完全

に除去する余裕がなく、「誤植」がまだ散見されるものの、体裁、印字品質などにはまったく問題がなく、上質な仕上がりの雑誌になっている。

(9)の工程で作成されたCD-ROMは以下のようなものである。まず、検索ソフトウェアであるが、これには凸版印刷で開発されたソフトウェア「竹簡」を応用した。これは、MS-Windows上で稼働するCD-ROM検索ソフトで、各種索引語による検索・表示、イメージ・データの表示など、一般的な機能を備えている。これを応用することにより、学会名、著者名、論文標題中の語などから論文を検索でき、また該当論文本文中の特定の語の使用箇所を探索できる。また、本文中における参考文献の引用箇所には、ハイパーテキスト流のボタンを設定し(下図参照)、これをマウスでクリックすると、論文末尾の文



献リストの当該参考文献の記述部分に移行するし、逆に、文献リストの方のボタンをクリックすれば、本文中でのその文献の引用箇所にジャンプする。同様に、本文中にある「Fig. 1」といった図表への参照もボタンになっており、これをクリックすると、イメージ・データとして保持されているその図表などが表示される。また、学会誌の各ページ全体もイメージとして保持しており、これを表示すれば、雑誌そのものをみるのと同じ結果が得られる。

一般商用のデータベース・サービスでも、米国では全文データベース化が昨今急速に進行している³⁾。わが国の学術出版においても、こうした方向は積極的に追求されるべきものと考えられる。学術情報センターの「学術論文データベース」はまさにこの動向に即したものであり、その効率的な作成方法や効果的検索方式について、今後とも研究開発を推進してゆきたい。

- 1) 根岸正光「SGMLに依拠する全文データベース・システムの研究開発」, 学術情報センター・ニュース, 第15号, p. 4-7 (1991. 3).
- 2) Charles F. Goldfarb, "The SGML Handbook," Oxford University Press, 1990, ISBN 0-19-853737-9. 664p.
- 3) 根岸正光「フル・テキスト・データベースの応用動向」, 情報処理学会誌, 掲載予定.

国際研究ネットワーク調整会議 CCIRN

学術情報センター教授

あさ の しょういちろう
浅野 正一郎

電子メールの転送やファイル転送を始めとする研究者間の情報転送の普及には、目ざましいものがある。電子メールを例に挙げれば、現在88の国又は地域が国際的な電子メールネットワークに加入しており、研究者間のメールの交換が可能となっている。更に、アジア・大洋州地域、東欧諸国、中南アメリカ地域、アフリカ地域等に急速に広がりつつある。

このような研究ネットワークは米国から開始されているが、その後西欧に広がり、これに日本、豪州を始めとする諸国が参加して今日の様相を呈するに至った。この間、北米（米国、カナダ）と西欧諸国との間に、CCIRN（Coordinating Committee for Intercontinental Research Network；国際研究ネットワーク調整会議、カーンと読む）を発足している。CCIRNの目的は、研究者の情報転送に必要な共通基盤（インフラストラクチャ）としてのネットワーク接続の調整を行い、経済的な接続の実現と技術的な解決に当たることとされている。CCIRNのもとに地域組織として、NACCIRN（North American CCIRN）とECCIRN（European CCIRN）が設けられており、地域調整にあたっている。それぞれの地域CCIRNには、研究ネットワークの資金支出と運用を行っている組織（多くの場合、政府組織）の代表が参加しており、北米地域はWilliam E. Bostwick氏（米国Federal Network Councilの議長）、欧州地域はKees Neggers氏（欧州研究ネットワーク機構RARE）がそれぞれ議長を務めている。

CCIRNの下には、技術調整を目的とするIEPG（International Engineering and Planning Group；国際技術検討グループ）が設けられており、CCIRNから指名された技術者が審議を行っている。IEPGも、北米と西欧の各地域に、それぞれNAEPGとEEPGを設けている。CCIRNは、1987年11月にワシントンで第1回の会合を開き、以降年に2回北米と欧州で交互に開催しており、またIEPGも同時に開かれている。

1990年11月の第7回会合で、CCIRNの調整範囲をアジア・大洋州に広げることが審議され、1991年5月の第8回会合から日本と豪州が参加している。学術情報センターは日本を代表するものとして、ここに招請されている。この場で、APCCIRN（Asia Pacific CCIRN）の設立が要請され、今年8月にハワイでAPCCIRNの設立準備会議が開かれている。学術情報センター浅野と豪州Robin Erskine氏がAPCCIRNの共同議長を務めることが承認され、同時にAPEPGの設立も決定された。

APCCIRNには、日本を始め米国、豪州、ニュージーランド、フィジー、韓国、マレーシア、UNESCOが参加したが、これらに香港、台湾、シンガポール、フィリピン、インドネシア、タイ等の諸国が参加するものと思われる。これらの諸国は、経済・制度的基盤が異なり、又学術研究環境も違うことから、特有の調整が審議されることになろう。加えて、開発途上の国が多いことから、これらの諸国に対する技術援助等も調整されることになろう。当センターとしても、できるかぎりの貢献をしていきたい。

図書館と情報サービスにおける 新しいフロンティアに関する国際会議

(台北, 1991年5月8-12日)

学術情報センター研究開発部長

やま だ ひさ お
山 田 尚 勇

標記の国際会議の原名は“The International Conference on New Frontiers in Library & Information Services”と言い、台湾で開催されたので、別に「圖書館與資訊服務新境界國際研討會」という中国語名も併記されていた。

会議は台湾のNational Central Library (国立中央図書館)の主催(sponsor)、台湾のLibrary Association of Chinaの協賛(co-sponsor)の下に、台北市の国立中央図書館内の国際会議ホールなどで、館長の楊崇森(Chung-sen YANG)博士を大会長とし、1991年5月8日から5日間にわたって開かれた。

参加は招待者に限られ、台湾以外からの出席者は、筆者の確認できなかった者を含めて、オーストラリア(1)、ブラジル(1)、カナダ(2)、デンマーク(1)、フランス(2)、ドイツ(3)、香港(4)、日本(1)、韓国(2)、オランダ(2)、南アフリカ(1)、スウェーデン(1)、イギリス(2)、アメリカ(21)の14か国、約45名であった。台湾からの正式出席者は、リストによると126名であり、さらに、どういう位置付けがよく分からないが、アメリカから3名のオブザーバーがリストに載せてあった。また、上記のほかにも台湾籍の出席者がかなりあった模様である。そのほか、招待は受けたが、出席できなかった国として、ナイジェリア(1)、タイ(1)が分かっている。

会議初日の5月8日(水)は、午後3時すぎから記者会見に続いて歓迎レセプションがもよおされ、台北市長Ta-chou HUANG氏の歓迎のあいさつがあった。ちなみに、この会議はその全容が土地のジャーナリズムに大きくとりあげられ、会議の様子が連日新聞、テレビなどで詳しく報道されていた。



本会議は9日(木)から11日(土)にわたる3日間、上記会議ホールと421号室との2室における並行セッションで行なわれた。

9日は8時からの参加者登録に引き続き、9時から開会式となり、台湾行政院の副院長LI Yuan-zu博士の歓迎のあいさ

つに続き、大会長の上記 YANG 博士が「台湾における図書館と情報サービスの発展」と題する基調講演の1を、続いて、国際図書館連盟 (IFLA) の会長である、ドイツのゲー (Hans-Peter Geh) 博士が「図書館と情報サービスの新フロンティアに対する IFLA の貢献」と題する基調講演の2を行ない、どちらも参加者に深い感銘を与えた。

続く10時半から11日の夕方までは二つの並行セッションに分かれ、全て招待による、58篇の技術的な論文の発表と討論が行なわれた (代読を含む)。そのセッションごとのテーマと発表論文数および論文内容 (題名ではない) はおおよそ次のようであった (トピックの次の国名は発表者の所屬地域)。ちなみに、展望的色彩の濃い論文から成るセッション1を除き、各セッションの各論文には、あらかじめそれを読んであるコメンテーターがつき、内容についての意見を述べ、かつ質問を用意していた。

セッション1：各国 (地区) 図書館業務の新展開 (3コマ, 12論文)

本セッションは、主に大所高所からの概括的展望論文が集められてあった。それらのトピックとしては、◎図書館員の資格の国際比較水準づくりに対する IFLA の貢献 (オランダ)、◎先進各国の図書館サービスの現状報告 (イギリス, スウェーデン, 北欧諸国, フランスの各国からの報告)、◎先進国から発展途上国へのサービスの適用 (南アフリカ)、◎発展途上国の現状と問題点 (韓国, 台湾 [特に文化センターについて], 香港, タイ, ブラジル, ナイジェリアの各国からの報告)。

セッション2：高度情報技術およびシステム (4コマ, 17論文)

◎主題による文献アクセス時の効率に関する実験研究, ◎百科辞典作成の新しい技術, ◎CD-ROMに基づくネットワークシステム, ◎中国語文献の共同利用, ◎OCLCのネットワーク, ◎1990年代のオハイオ図書館自動化ネットワークの大構想 (以上6件アメリカ), ◎台湾における：図書館自動化, バイオ・メディシン情報のアクセスと配送, 中国語ビデオテックス, 台湾の図書館ネットワーク, 台湾国立師範大 (NTNU) における図書館自動化ネットワーク, 小規模図書館のPCによる自動化, 中国語の電子辞書, 文字学データベースと中国古典処理 (以上8件台湾), ◎中国本土の図書館の将来 (カナダ), ◎中国語文献の機械可読化 (香港), ◎韓国 MARC (韓国)。

セッション3：新しい情報メディアとサービス (4コマ, 13論文)

◎学術図書館の発展と新技術 (オーストラリア), ◎図書付番法の新傾向 (ドイツ), ◎新しい情報メディアの青少年への適合性 (カナダ), ◎CD-ROMに基づく図書館：ワークステーション・ネットワーク・全文データベースの段階的発展, ◎インタラクティブ・ハイパーメディアと図書館, ◎アメリカ大学の法学図書館の将来, ◎異常状況にある利用者グループに対する公共図書館のサービス (以上4件アメリカ), ◎資源共用の展望, ◎情報検索ネットワークにおける諸問題, ◎対話的図書館案内システム, ◎行政院における情報システム, ◎台湾における情報サービスの統合：立案および遂行にかかわる科学技術情報センター (STIC) の役割 (以上5件台湾), ◎学術情報センターとデータベースサービス (日本)。

セッション4：図書館と情報に関する教育の新展望（3コマ，10論文）

◎図書館情報学教育の展望，◎技術を媒介とした情報専門家の教育，◎科学技術専門家のキャリア選択に与える技術の衝撃（以上3件アメリカ），◎利用者のニーズに合わせたカリ



キュラム（イギリス），◎台湾における図書館識知（library literacy），◎台湾における図書館情報学のカリキュラム，◎大学図書館における利用者の教育：現存カリキュラムの分析，◎台湾における主題専門図書館員の将来に対する提言，◎情報社会における児童図書館員へのチャレンジ，◎中国本土における図書館学教育（以上6件台湾）。

セッション5：中国学の分野における図書館および資料の活用（2コマ，6論文）

◎アメリカの中国学における図書館資源と学術研究，◎北アメリカにおける中国語文献への書誌アクセス：過去・現在・未来，◎中国学の分野における議会と国家へのサービス：議会図書館極東法学部門，◎中国に関する1976年－1989年間のアメリカの博士論文の世界：中国学の分野における主要情報源（以上4件アメリカ），◎ヨーロッパ中国学図書館協会（EASL）の中国語逐次刊行物データベース（ドイツ），◎コレジ・ド・フランスの中国学高等研究所図書館における叢書（フランス）

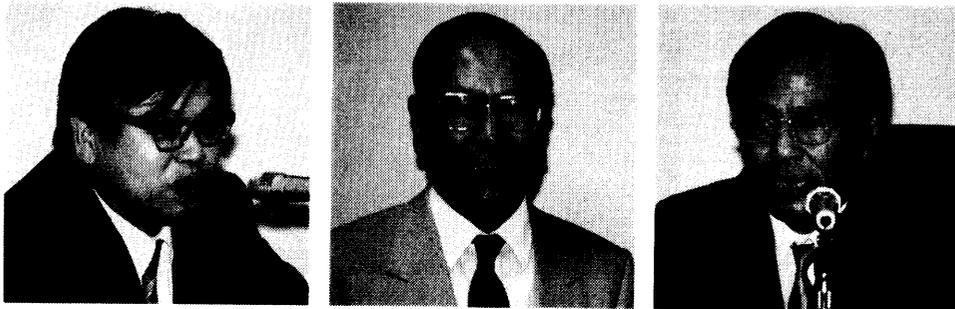
以上、会議にはIFLA 会長ゲー博士の他にも、英国から英国図書館会長マイケル・S・ワトソン博士、アメリカから議会図書館のヘンリエット・D・エイブラム女史、デンマークから王立図書館副館長代理のクヌード・ヴォーン氏などを始めとする、斯界の錚々たるメンバーが列席し、はなはだ活気に満ちた3日間であった。日本からは、筆者のほかに、斯界の権威が2名招待を受けていたので、その蔭でおとなしく出席するつもりになっていたが、いざ蓋を開けてみると日本からはただ一人の出席者となり、何かにつけて日本を代表させられ、経験の浅い筆者として汗顔の至りであった。

会場の国立中央図書館は、故蒋介石総統を記念する壮大な中正記念堂の真正面にある、新しい近代的な建物で、会議そのものも非常によく運営された。特にアメリカと台湾の協力の密接で、かつ規模の大きいものには圧倒され、われわれ日本も、もっと国際協力に力をそそぐ必要のあることを痛感させられた。

会議の最終日12日（日）は著名な故宮博物館を含む市内の見学ツアーに当てられていたが、日程の関係で筆者は参加しなかった。

全体として、非常に有意義な会議であり、また会議の運営にあたられた方々ならびに多くの参加者にはいろいろな面で大にお世話になった。最後にはなかったが、ここで改めて厚い感謝の意を表したい。

日本における国際書誌調整第9回公開講演会



標記の第9回公開講演会を1991年7月24日（水）午後に約40名の参加を得て、学術情報センター別館会議室で開催したので概要を報告する。

センター副所長大野公男教授の開会挨拶につづき、「韓国産業技術情報院の現況と発展の方向（Current Status and Development Plan of KINITI）」と題して、李昶教（Mr. LEE Chang Kyo）副院長は、1991年1月に産業研究院（KIET）の附設産業技術情報センター（CITI）から機構を改編され、新しく発足したKINITIの現況と産業技術情報を担当する総合情報機関として、その現在および将来計画について講演した。KINITIは韓国におけるデータベースの構築、検索サービス、ネットワークの構築など多面的かつ先端的な、そして韓国内でも有数の実績を有しており、創設期、発展期の労苦そして度々の組織変更を経てきた実績をふまえた内容であった。

崔成真（Dr. CHOI Sung Jin）成均館大学図書館学科教授は同大学に附設された司書教育院長でもあり、「韓国における科学情報政策の立案と実現（The Formulation and Implementation of Scientific Information Policies in Korea）」と題して、韓国における図書館情報政策、特に科学技術情報政策に関して包括的な講演があった。国家計画である第6期経済社会発展5か年計画（1987-91）では、科学技術情報の基盤整備がうたわれており、事実、「5大電算網」計画は着実に進行しているが、隣国の科学技術情報政策の概要とそれを担う機関が言及され、将来の日韓学術情報交流の基礎知識となった。

花房征夫アジア経済研究所資料部長は「アジア諸国の「現地語」資料とアジア経済研究所の対応」と題して、アジアの現地語資料についての全般的な状況と問題点について詳細かつ具体的に論じた。多くの経験を踏まえた実務家としての経験と示唆に富んだ講演であった。漢字語をはじめとする多言語資料との取り組みについて、「現地語主義」、時間がかかる人材養成、機械処理システムの開発と幅広いネットワークの必要性などについて指摘し、今後とも成長が見込まれるアジア「現地語」資料の背景を論じた。

さらに、「欧米日本語コレクションの日本語情報としての再評価」と題して、センター井上教授が発表し、日本に関する情報の海外提供手段の一環として、外国で蓄積が進んでいる日本語コレクションの日本情報源としての可能性について、前回の韓国訪問調査の結果を含めて、欧州と米国の訪問調査の内容を報告した（文責：金容媛）。

第3回日本情報国際会議および ICSTI（国際科学技術情報協議会）シンポジウム

学術情報センター教授

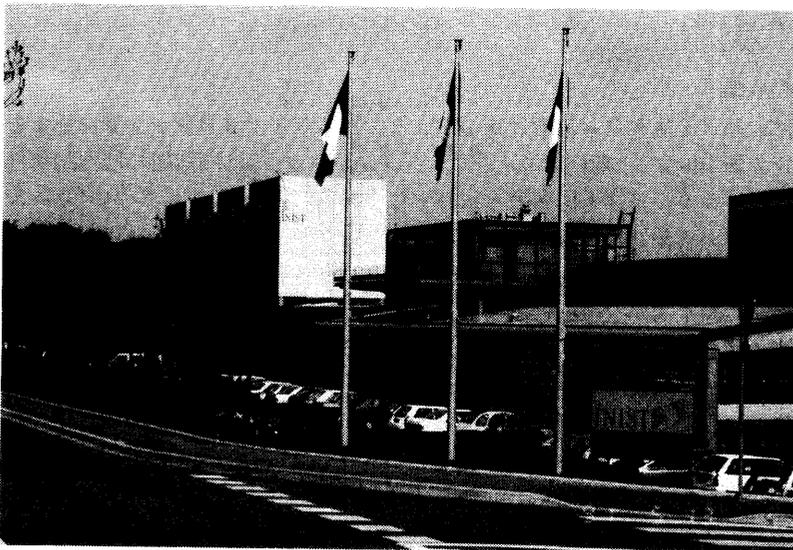
ね ぎし まさ みつ
根 岸 正 光

学術情報センター助教授

あ だち じゅん
安 達 淳

1. INIST

今回で3回目を迎える日本情報国際会議（The 3rd International Conference on Japanese Information in Science, Technology and Commerce）は、フランスのナンシーで1991年5月15日から18日にわたって開催された。1987年の英国ウォーリック、1989年の西独ベルリンに引き続くもので、今回は1988年に発足したフランス政府に属するINISTS-CNRS（Institute de l'Information Scientifique et Technique, Centre National de la Recherche Scientifique：フランス国立科学研究センター科学技術情報研究所）が主催し、その本拠地であるロレーヌ地方の中心都市ナンシーが開催地となった。ナンシーはエミール・ガレのガラス工芸などで日本人にも人気の高いアール・ヌーボー発祥の地である。現地人ガイドによれば、近頃、日本人の買い漁り？でこれら工芸品の価格が高騰して困っているとのことであった。ナンシー市では、町おこしのため、郊外の丘陵地を先端産業団地として開発しており、INISTもパリからここに移ってきた。もっとも実際にパリからの移転に従った職員はわずか15%程であったとのことである。会議場とされたINIST



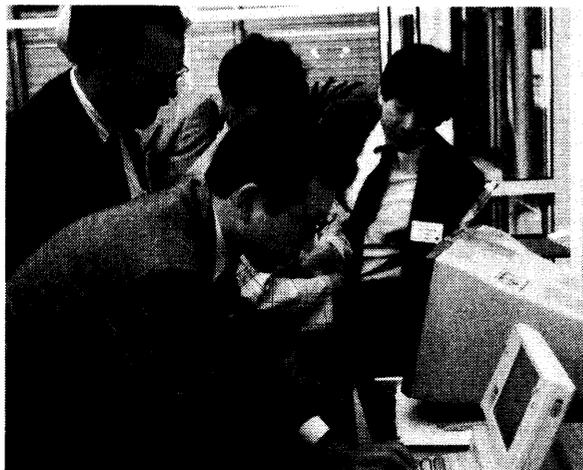
会議場の INIST

の建物は、フランス現代建築によくある、例の奇妙キテレツなもので、俗人的表現では、鉄骨むき出し、トタンぶきの安普請ということにもなりうるが、中の住み心地は結構快適そうであった。今回の会議には、

次項の ICSTI シンポジウムとあわせて、学術情報センターから根岸、安達、橋爪が参加し、報告およびデモを行った。

2. ICSTI シンポジウム

日本情報会議に先立つ5月13日から15日には、同じ会場で ICSTI (International Council on Scientific and Technical Information) のシンポジウムが開かれた。ICSTI は、1952年に ICSU/AB (国際学会連合評議会文献抄録部会) として発



NACSIS ブースのデモンストレーション

足した国際組織であり、科学技術に関わる国際的および各国別の学会連合体を中核的会員とし、これに国際的に有力なデータベース作成・流通機関が加わって運営されている。実際の活動は、後者によってなされるものが主体となっている。今回のシンポジウムは ICSTI 創立40周年を記念して企画されたもので、科学技術情報の提供者と利用者たる研究者等との関係、新しい需要に応えるための新技術によるサービスを主なテーマとして、報告と討論が行われた。出席者は17カ国110名、日本からは筆者の他5名であった。

上述のとおり、ICSTI は科学技術分野のデータベース関連企業・機関の活動を主体にした組織であり、ここでの意見交換を通じて、情報の国際的流通に関する標準化、組織化などが実質的に進展するという状況にある。学術情報センターでは、1988年にパリの ICSTI 事務局を訪問し、また1989年のフランス、オルレアンでの総会に出席して、ICSTI への加盟を検討している。

3. 日本情報国際会議

日本情報会議は、15日午後から参加者登録が始まり、16日からの3日間が会議にあてられた。登録者は18カ国130名で、前回よりも少なかったが、これには開催地の地理的条件も影響していると思われる。日本人出席者も案外少なく30名ほどであった。プログラムでは37論文を10セッションに分けて発表することになっていたが、フランス国鉄の無予告ストのためか、フランス人発表者の欠席による発表とりやめや代読があり、また湾岸戦争の影響とかで米国からの参加者が一般的に減少し、発表のとりやめや代読というのもあった。

前半の発表の中で注目されたのは、わが国の通産省と(財)データベース振興センターによる国際共同プロジェクトの提案である。これは、海外からわが国の日本語データベースにアクセスする場合に、英日機械翻訳を介して検索キーワードを動的に英訳することで、英語での検索が可能になるようなシステムを開発しようというもので、その評価者として広く海外機関の参画を呼びかけた。このほか、日本情報の入手などについて様々な観点からの発表が続いたが、会議の締めくくりの討論において、今回の会議にはエンド・ユーザーである企業からの参加が少なく、また日経、JAPIO など日本の有力データベース業者

が不参加であったのは残念であるとの指摘が出されていた。事実、発表に関しても、インターメディアリーの立場、それも小規模なコンサルタント等からのものが多かった。また、相変わらず機械翻訳や日本語に関する問題の発表がヨーロッパからは多く、関心も高かった。

学術情報センターからは、SCIに基づく日本論文に対する国際的な引用分析（根岸，安達）と、学術雑誌総合目録CD-ROM（橋爪，影浦）に関する発表の他、英国の図書館からNACSISの目録システムを利用する実験に関する経過（根岸，宮澤，ケンブリッジ大図書館小山，英国図書館キング）を報告した。

4. オンライン・デモンストレーション

今回もエキシビジョンが並行して行われ、日本や外国の16機関が参加してデモや展示を行った。学術情報センターは、第2回ベルリン会議でラップトップ機を用いたオンライン接続によるデモを行ったが、今回はディスプレイやCD-ROM装置など、機材をさらに充実させて、積極的に対応した。筆者らにとって、外国でのこうしたオンライン・デモは、その国の通信事情や制度を実地に体験できるという点で有意義な機会でもある。ICSTIシンポジウムに根岸が出席する間、安達、橋爪はデモに向けて接続試験を行った。INISTの技術者は大変協力的で、実務的能力も高く、フランス語と英語ととりまぜて何とか問題に対処してゆくことができた。要は現地の国際パケット交換網を通してNACSISに接続するのであるが、フランスのパケット網TRANSPACは、国際標準から逸脱したローカル仕様が少ない素直な仕様であり、NACSIS-IRのような手順のない通信接続は簡単に成功した。もっとも、他の機関では、このような単純な接続にも手間取っているケースが多かった。

問題なのは、目録システムNACSIS-CATでの画面を利用した通信で、いわゆる「プロトコル」が出てきて厄介になるわけである。前回のベルリンでは、ドイツのパケット網DATEXのローカル仕様に悩まされ、大山助教授開発の、規範として使われているVTSSソフトウェアに、大山先生自らが現場で対症的に手を入れて何とか動かしたという経緯がある。今回は市販のNACSIS-CAT用ソフトウェアが使える状況であったが、これに加えて大山製ソフトをも携行した。既述のとおりTRANSPACには仕様上の問題がないので、大山製ソフトはすぐに稼働した。一方、市販ソフトの方は、エラーによる再試行がなかなかうまく働かず、会議当日までには安定的動作状態に持ち込むことができなかった。問題は、恐らく雑音によるエラーが発生した場合の対処にあると思われた。つまり、大山先生のソフトは、さすがにこのあたりも丁寧に作られており、エラーからの回復動作も万全というわけである。エキシビジョン開始後も、市販ソフトの方も動かすべく、パソコンと格闘していたが、どうやらアース（ちなみにフランス語では、La Terre）をとれば耐雑音性が高まることが判明し、何とかデモができる状態にもっていった。

幸いデモは好評で、突っ込んだ質問をされて、返答に窮することもたびたびという状況であった。デモの実施については、現地INISTのエンジニアおよびNACSIS各部署の担当者の協力に負うところが大きい。この場を借りてお礼を申し上げる次第である。

なお、次の第4回会議は、1993年の夏にスウェーデンのルント大学で開催されることになった。わが国の事情に通じたSigurdson教授がコーディネーターとして活躍される予定で、成功が期待される。

EXIRPTS (研究情報の国際交換に関する専門者会合) 第9回会議 (カナダ オタワ市)

学術情報センター

研究開発部長

やま だ ひさ お
山 田 尚 勇

事業部データベース課

ゆ ら のぶ みち
課長補佐 由 良 信 道

EXIRPTS (Exchange of Information on Research Projects: 詳細は本センターニュース13, 14号参照) が, 本年の5月21日~24日を会期として, カナダNRC (National Research Council Canada) において開催され, 今回も8か国9機関の代表者の参加を得て, 活発な討議を行った。



EXIRPTS メンバー氏名

日 本

NACSIS 山田 尚勇
同 由良 信道

JICST 内田 尚子
同 渡辺 俊彦

アメリカ

NSF Gerald Stuck
同 Albert Muhlbauer

イギリス

SERC Keith Jeffery
同 Judy O. Lay

フランス

CNRS François J. Miquel
同 François Vadrot

ドイツ

DFG Gernot Jander

イタリア

CNR Fulvio Naldi
同 Gloria Bordogna

カナダ

NRC Peter Wolters

スウェーデン

STU Helena Fernholm
同 Elsa Werngren

オタワ市郊外、緑の起伏がゆるやかに広がる NRC の一画に、ひときわ大きな「ライブラリー」と呼ばれる建物があり、その中にある一室が本会議の議場にあてられた。

この建物は NRC の一組織である CISTI (Canada Institute for Scientific and Technical Information) の施設であり、通称が示すとおり、図書館である。ただし、業務の運用面でみると、閲覧よりも、世界各国の科学技術分野の情報に関するデータベースの作成及びドキュメントデリバリーを主体としている様子であった。例えば、学術雑誌についてみると、年間3万種を超えるタイトルを受け入れ(その中には、和雑誌を含む多数の日本の雑誌があった。)、これらの雑誌情報をデータベース化し、CISTI のオンライン検索サービスである CAN / OLE によって、カナダのユーザに提供している。

この意味で、ここがカナダにおける科学技術分野の中央図書館的な役割を担っているといえるだろう。EXIRPTS データベースも、CAN / OLE を通して、カナダ国内にサービスされることになっている。

さて、今回の主な議題及び検討内容についてであるが、概ね次のとおりである。

1. 各機関における現況報告

交換可能なカタログデータの総数は、63,500件を超した。これは1990年11月の時点より、75%増加しており、本事業は全体として進捗した。

個々の機関における主な進捗に関しては、NACSIS, CNR, SERC の3機関が、利用者サービスの運用に入っており、NSF, NRC が運用に向けて準備中であること、また NACSIS, CNR, SERC は、EXIRPTS 向け専用のデータ交換プロトコル ENID に基づくシステムのインプリメントを完了し、NSF はこれを開発中であること等が報告された。

2. 今後の課題

本会議は、1987年に発足して以来、各参加機関のたゆみない努力により発展を続け、本年の計画においては、全参加機関がカタログデータを提供できるまでに至った。

しかしながら、自国語によるカタログデータを米語化することに困難を感じている機関が存在すること、また今後は、研究プロジェクトの成果情報だけでなく、on-going 情報の提供も望まれることから、これらの実現化に向けての困難を克服するため、参加機関は更なる諸資源を必要としていることにつき、EXIRPTS の親会議であるプレジデント会議に対して進言することとした。

3. 結論

EXIRPTS の運営に関し、この1年に重要な進展がみられた。他の国又は機関から、EXIRPTS に対して相当な注目が払われるようになった。このため、今後は交換データの新鮮度等の問題の他に、新規参加国受入基準が検討課題となる。

4. その他

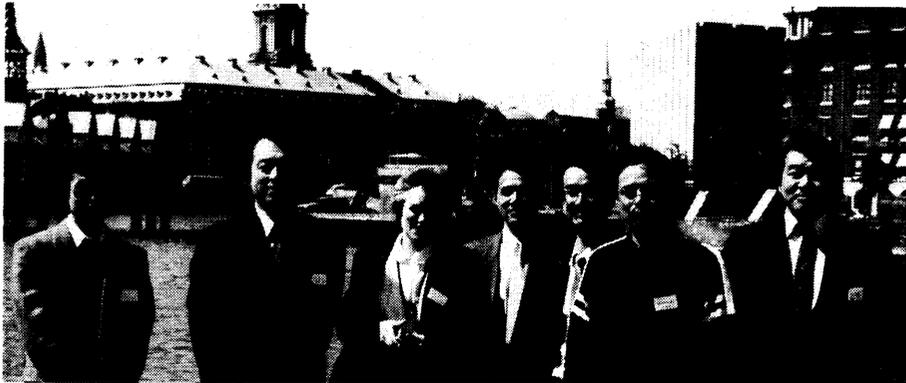
今後における本会議の開催は、通常年1回とすること、各機関間におけるデータ更新の同期をとるため、ENID の改善を図ること等が計画された。

学術情報流通に関わる標準化動向調査

学術情報センター教授

ないとう えいすけ
内藤 衛 亮

1991年5月25日より6月2日にかけて標記の調査を行った。これはデンマーク・コペンハーゲンで開催された国際標準化機構 (ISO) / TC46 の第24回総会を中心に、情報の生産・蓄積・流通に関する欧米各国の動静および東アジア各国の対応を観測する目的のものであった。日本からは宮澤彰、内藤 (センター)、上田修一 (慶應大学)、杉山時之 (国会図書館)、牛崎進 (立教大学)、渡辺信一 (大日本印刷) 氏のほか、菊池文彦氏 (JICST パリ事務所長) ら7名が出席した。ちなみに写真中央の女性がTC46の議長ベリーナ・ホースネル (英国) である。



ISO / TC46 の構成は下記のとおり (行末の国名は幹事国)。

TC46		(ドイツ)
SC2	書き言葉の変換 (翻字, ローマ字化)	(フランス)
SC3	用語	(ドイツ)
SC4	図書館におけるコンピュータ応用	(米国)
SC8	図書館, 情報, 出版関係の統計	(英国)
SC9	文献の識別・記述	(カナダ)
SC10	文献の物理的保存	(デンマーク)
WG2	国名コード	(ドイツ)

TC46 の標準化対象範囲は、ドキュメントの生成から利用にいたる一連の流れのいたるところに標準化課題があるが、表記・表現にかかわるものとしては、各国文字のローマ字化ないし翻字 (SC2) がある。かつて日本文字のローマ字化で話題となったが、最近では韓国朝鮮文字のローマ字化が国際標準化の対象とされ、当事国としては韓国、北朝鮮、中国、ソ連があり、事務局をフランス (Afnor) が担当している。

図書館・ドキュメンテーション分野におけるコンピュータ応用 (SC4) では、SGML の応用規格、LSP の応用規格など、いずれも米国主導の制定作業が続けられている。これは一方で、MARC フォーマットの確立・制定・普及を背景とし、他方で、図書館分野の

自動化やネットワーク化など米国の実績を普及することによって、米国の成果をいわば「保護」する意味合いもあろう。LSP を背景とした OSI の図書館分野の応用規格が米国から一括審議方式で提案されることが予想される。

図書館・情報サービス関連の統計 (SC8) は、わが国では「大学図書館実態調査」(文部省)、「日本の図書館」(日本図書館協会)、「専門情報機関総覧」(専門図書館協議会)、「データベース台帳」(通産省・データベース振興センター)、「データベース実態調査」(学術情報センター) などがある。図書館統計として「ユネスコ統計」が参照されることが多かったが、国際比較のために TC46 の図書館・情報サービス関係の統計規格を参照することもある。SC8 に日本は1990年から正式参加したばかりである。パフォーマンスメジャーの標準化を検討中である。

文献の識別の典型は ISBN, ISSN であるが、その他に「報告書」「音盤」「ビデオテープ」など「記録物」全般に統一的な識別番号を付与することを TC46 / SC9 は推進している。識別番号のシステムは番号付与の方式 (ISBN の場合はモジュール11) をもとにして、各国内に登録機関を設置して運営するところが国際標準化でありながら特異な点である。日本の ISBN は日本図書コード管理委員会が出版界各社の拠出金によって運営されている。ISSN は国立国会図書館が日本 ISDS センターとなっている。

二次情報データベース (抄録・索引) の書誌記述が多くのデータベースで標準化されていけば、オンライン検索の結果をそのまま利用して ILL / 文献複写サービスに申し込む際にいっそう円滑にできるという点で、SC9 が推進している各種書誌記述の標準化は大きな意義がある。

資料の保存には二つの方法がある。一つは知的内容の保存で、マイクロフィルム化、デジタル化などが具体的方法である。もう一つは資料の物理的媒体そのものの保存で、紙の耐久性が標準化課題となる。当面、SC10 は資料の物理的保存に着目している。

データベースの構築と流通において標準的仕様 (標準規格) が技術的・経済的利益を生み出すか、発展への阻害要因となるかは、たえず議論の対象となるが、学術情報センターでは、目録基準に加えて、1989 / 90年にデータベース受け入れの際の「技術仕様」を設定した経緯がある。国際規格や国家規格等との整合性ある仕様を目指したものであった。

データベース中のレコードの識別は、目録レコードのようにレコード自体と物理的な紙束との関係、知的なまとまりと物理的なまとまりとの関係付けなど、英米目録規則、日本目録規則などがあつかおうとし、学術情報センターの目録システムが実現してきたものであるが、今後はフルテキストやイメージのレコードを識別する方法の標準化が課題になる。フルテキストの場合はデータベースの形態やバージョンが多様化し、ハードコピーも並存しうるからである。国名や言語名のコード表のほか、データ要素のリストと名称は EDI, SGML, 目録データベースなどで重複しながら利用されつつある。総合的なデータ要素台帳を整備する動きがある。

欧州各国の国家規格が EC 規格に一括審議で転換されていく方向にあるが、「1992年」を契機に米国とは別の大きな勢力が成立することになる。センターはわが国の N1 プロトコル開発の実績に方向づけられており、標準化が重要であることを承知している風土にある。ISO では TC46, JTC1 / SC24 に貢献しており、漢字関係 (CJK-JRG) や電子文書関係 (INSTAC), OSI 関係の標準化にも大きく貢献している。

CJK-JRG：漢字コードに関する国際会議

学術情報センター教授

みやざわ あきら
宮澤 彰

はじめに

7月22日から24日まで東京芝の機械振興会館で第1回のCJK-JRG (China Japan Korea-Joint Research Group) が開催された。東アジアで共通に使われる漢字について、その共通の文字レパートリを作成する事について検討する会議である。この会議で学術情報センターの山田研究開発部長は議長をつとめ、また、宮澤が日本代表の一人として出席した。当センターでは従来より東アジア文字型データベースの交換について国際共同研究を進めるなどこの分野での調査、研究を積極的に行ってきたが、今回の会議の結果は今後の東アジアでの学術情報流通に大きく貢献しうるものであり、また、当センターの事業にとっても影響を持ちうるものであるため、ここに簡単な紹介を行う。

経緯

この会議の直接のものとなったのは、90年2月にソウルで行われたISO / IEC JTC1 / SC2 / WG2 アドホック会議での決議であった。このアドホック会議では世界中の文字を集めた国際標準文字コード (万国符号化文字集合 DIS 10646 Universal Coded Character Set, 当時の段階では DP 10646 Multipel-octet coded character set, 以下10646と呼ぶ) の標準化を進めている過程で漢字の扱いについて意見がまとまらず、その調整のために開かれたものであった。アドホック会議では大きな進展はなかったが、この問題はJTC1のみにとどまらず、より広い意見を集めて検討する必要性が認められ、中国、日本、韓国の各国がCJK-JRGの設立に向けて努力することが申し合わされた。

このアドホック会議の結果を受けて、日本はCJK-JRGへの参加を表明し、情報処理学会の技術委員会のもとに「漢字標準化専門委員会」を設けて日本の対応について検討してきた。韓国も参加を表明し最初の事務局を引き受けたが、中国は当初不参加を通告してきた。しかし、今年に入って第1回のCJK-JRGが東京で開かれることが決まると参加を表明してきた。

背景

これまで、漢字コードは各国でそれぞれ標準化されてきた。日本ではJISとして、また、中国ではGB、韓国ではKSなど、それぞれの標準を持っていた。これらは当然各国で使用する文字をコード化したもので、たとえばJISには現代中国の簡化字がはいっていないし、韓国の国字もはいっていない。

10646の漢字部分は、当初案 (DP 段階) ではこれら中国、日本、韓国の各国標準をそのまま別の場所に埋め込むということになっていた。この方法は各国標準との関係がスムーズという利点があるが米国等からクレームがついた。各国の標準でたとえば「一」という漢字は共通に含まれるから無駄でありこれらを統合化したコードが必要であるというものである。中国もその後統合化を支持するようになった。

80年代後半には国際標準化と独立に、各国標準も当初の文字セットを拡張する動きが相次いだ。これによって国際標準に収容しなければならない文字数が増えたことも国際標準統合化に対する圧力となった。

もう一つの関連した動きとして Unicode と呼ばれるものがある。これは Xerox や Apple などを中心となって、ISO とは独立に10646と同じような多文字種のコードを作成してきたものである。このコードが米国の他のメーカからも支持を得るようになってきている。このコードも漢字については独自の統合化を行ってきた。

統合化 (Unification)

統合化はごく単純に考えればそれほど難しいものでないと考えがちであるが、少し踏み込んでみると字体、字形などが絡んで複雑な問題を抱えていることがわかる。たとえば「叶」という字は現代中国では「葉」の簡化字であるが、これを日本の「叶」と同じとして良いのか？中国の「骨」は冠の上の部分の形が違うが、これは別の字か同じ字か等々である。これらの問題点のため、統合化はその規則をはっきりさせなければ、行く人毎に異なる結果がえられるものである。

日本のポジション

漢字標準専門委員会では日本のポジションを検討してきた。その結果、少なくとも統合化を必要とする分野があることを認め、統合化の技術的問題点を検討した。細部は略すが、結論は要するに統合化は漢字の「意味」のアスペクトを無視して「形」だけから行えば可能である、というものである。また、「形」の異なりをいわゆる字形の差と考えるかどうかについてのルールも検討してきた。

会議の結果

会議の決議事項の要点は、統合化した文字レパートリと配列を12月までに作成するという合意がなされたことである。文字レパートリというのはコード化されていない文字の集合である。具体的には現在ある各国標準文字セット（及び韓国の準備中の標準）をベースとしてルールに基づき統合化を行い対応表を作成する。配列は康熙、大漢和、漢語大辞典、大字源に従うことが決定された。次回の会議は9月に行いレパートリと配列の第1版を作成する。

今後の見通し

ISO 10646 と Unicode の関係についてはいまだ流動的であるが、いづれにしてもこれらの文字コードの漢字部分には、今回の文字レパートリが採用されることになるであろう。文字レパートリが共通であれば、すくなくとも交換性は保証されることになる。

これまで、学術情報センターでは中国語、韓国語などを含むデータベースの流通について国際共同研究を含め長らく検討してきた。その過程で文字セットは第一に解決せねばならない問題であった。もちろん独自の文字セットを作成することによって解決をはかる方法（時間的にはもっとも速い）もあったが、データベースの流通、そのコスト等を考えると、最終的には国際標準を確立普及させるのがもっとも確実な方法と考え、このために多くの努力をしてきた。今回の会議はそれらの努力の一つの結果であり、多言語・他文字種のデータベースの交換に向けて、ようやく実現性のある検討のベースができつつあるといえよう。

学術情報ネットワークの拡充整備と これに伴う運用停止のお知らせ

1. 学術情報ネットワークの拡充整備

学術情報センターは「学術情報ネットワーク」として、パケット交換網及びインターネット・バックボーン（予定、「インターネット・バックボーンの運用に向けて」参照）を提供しています。パケット交換網は、学術情報センターが整備するノードを介して全国の大学等の計算機センター、図書館等を接続したデジタル・ネットワークです。また、インターネット・バックボーンはTCP/IPを通信プロトコルとして、学術情報センターノードを中心として8ノード機関（北海道大学、東北大学、筑波大学、東京大学、名古屋大学、京都大学、大阪大学、九州大学）を結ぶネットワークであり、平成3年12月から試行運用を開始します。

学術情報ネットワークパケット交換網への接続コンピュータ数は、平成3年8月現在で334に達し、研究者等に対する学術情報の基盤的流通網として、ますます学術研究に占めるウェイトが大きなものになってきています。パケット交換網は、平成2年度までに、学術情報センターを中心とした27ノード機関相互間を接続する幹線網として整備してまいりましたが、平成3年度は、パケット幹線網ノード整備の最終年度として横浜国立大学にネットワーク通信機器（PMX、MUX等）を設置して、学術情報ネットワークパケット交換網の拡張を行い、平成4年1月から新たな構成で運用を開始します。これで、国内ノードは28機関となります（別図参照）。今後も、必要に応じて回線速度の見直し等により高度化を図る予定です。

2. 年末の運用停止

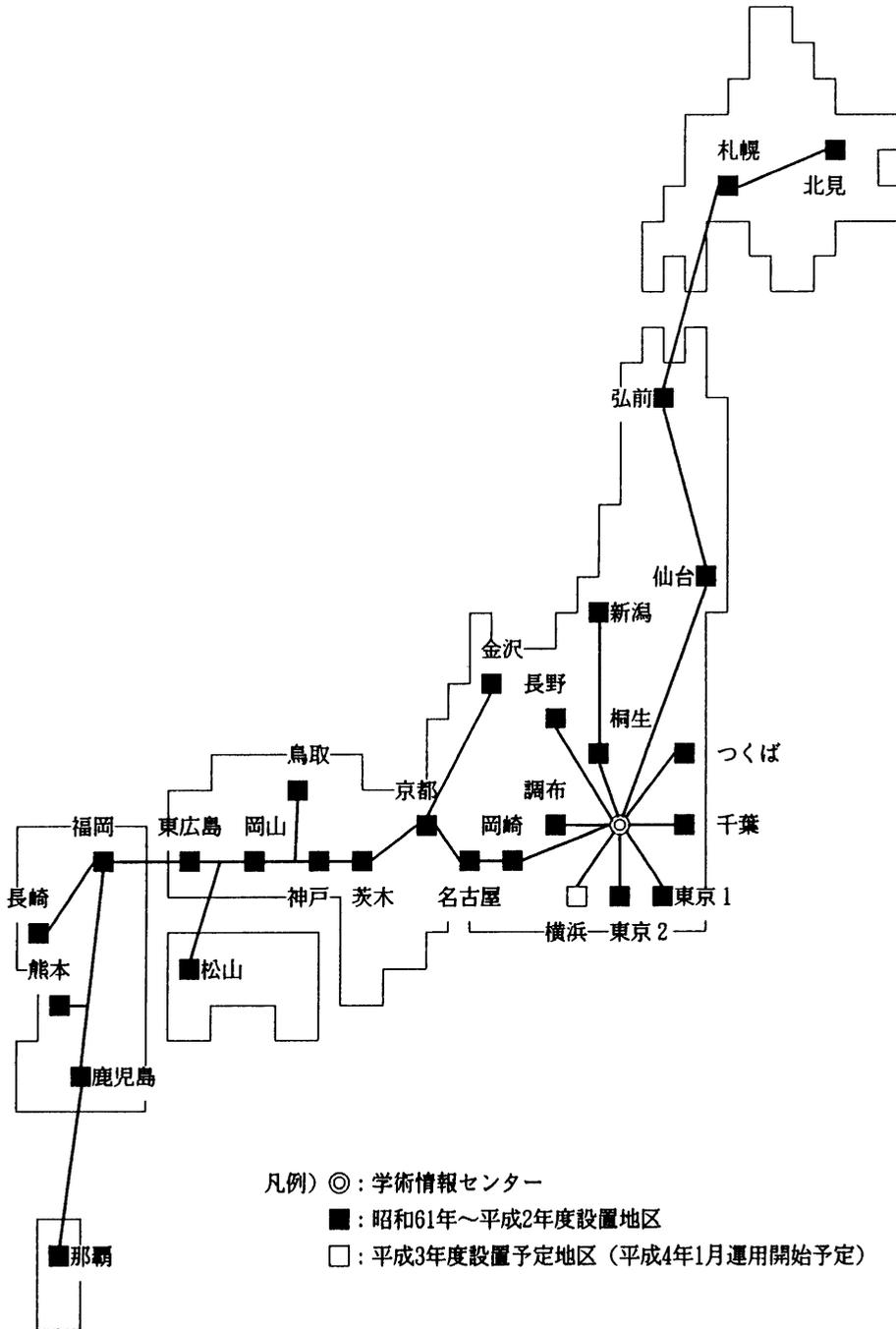
学術情報ネットワークの加入機関に対しましては、別途、直接連絡致しますが、このような新規ノードの設置ならびに網構成の変更に伴い、下記期間中は学術情報ネットワーク（パケット交換網及びインターネット・バックボーン）の運用を停止させていただきますので御了承いただきたくお願いいたします。

学術情報ネットワーク運用停止期間

平成3年12月22日（日） 午前9時から
平成3年12月27日（金） 午前9時まで

12月27日午前9時以降、年末年始を含め通常の運用をいたします。なお、上記の間中でも作業の内容により、一部の区間で利用可能なことがあります。作業期間中であるため、利用の途中で利用できなくなることもありますので、御承知おきください。また、学術情報センターの電子メールシステムの利用（目録・所在情報サービス（NACSIS-CAT）及び情報検索サービス（NACSIS-IR）については「メインシステム機種更新作業に伴うサービス休止の予定」を参照）については、学術情報ネットワークを介さずに利用することも可能です（例：DDXあるいは電話網によって）。また、個々の大学等の計算機センター等のサービスの利用については、当該センター等にご照会下さい。（ネットワーク係）

学術情報ネットワーク（パケット交換網）概念図



メインシステム機種更新作業に伴うサービス休止の予定

本センターのメインシステムは、昭和63年度に現機種（HITAC M684H および M682H）に更新し、目録所在情報および情報検索サービスを運用しておりますが、利用者の増加とデータベース容量の増加に対処するために、平成4年1月より、新しい機種に更新することとなりました。更新作業は作業量が膨大なため、従来の年末年始の目録所在情報および情報検索サービス休止期間を以下のとおり延長し、実施する予定です。ユーザーの皆様には大変ご迷惑をおかけいたしますが、御協力よろしくお願い致します。

サービス休止期間：平成3年12月16日（月）～平成4年1月6日（月）

なお、オンラインサービス以外にも、目録所在情報サービスの個別版提供業務も当該期間中は休止することとなりますのであわせて御承ください。（システム管理課）

大学等の研究者等提供データベースのサービス開始

平成2年度から開始した「学術情報センターにおける大学等の研究者等提供データベース受入事業」は、全国の学術情報データベースを作成している研究者の注目を引き、多くの問い合わせや提供申込がきています。

このうち、平成3年8月現在、受入を前提に内容調整やテスト等を実施しているデータベースは下表のとおりです。これらのデータベースについては、準備が整い次第、順次サービスを開始する予定です。

なお、各データベースのサービス開始についてはNACSIS-IRのオンラインニュース等によりお知らせします。また、データベースの内容・利用方法等については、サービス開始時に発行予定の「NACSIS-IR データベースシート」を御覧ください。

	データベース名	データベースの概要
1	RAMB IOS	生物学（分子生物科学）諸分野のレビュー文献情報
2	化学センサー	各種化学センサーに関する書誌情報と数値データ
3	日本独文学会文献情報	日本独文学会所蔵の学術雑誌、図書等の文献情報
4	家政学文献情報	家政学関係の国内文献に関する文献情報
5	脂質情報	脂質の名称、化学構造、生物活性等のデータ及び文献情報
6	化学スペクトル	¹³ C - NMR データ
7	電気化学	電気化学に関する数値及び文献データ

（データベース課）

国立国会図書館作成データベースの導入

学術情報センターでは、国立国会図書館の協力を得て、同図書館が作成する『雑誌記事索引データベース』及び『国会図書館科学技術欧文会議録データベース』の提供を受け、NACSIS-IRによるサービス開始に向けて準備をしています。

両データベースの概要は以下のとおりです。

1. 『雑誌記事索引データベース』

本データベースは、我が国の学術雑誌に掲載される論文の索引データベースで、記事索引データベースとしては最大規模のものです。また、3か月毎に冊子体が『人文・社会編』と『科学技術編』とに分冊刊行されています。

学術情報センターでは、同データベースを磁気テープにより提供を受け、NACSIS-IR用にデータ編集してサービスします。

概要は次のとおりです。

(1) 収録対象

我が国で刊行される、人文・社会科学分野、自然科学分野の学術雑誌約3,300種に掲載される論文の標題、著者名、掲載雑誌名、巻号、ページ等を収録。

(2) 収録範囲、収録件数

1984年以降のデータを収録しており、現在のデータ件数は約70万件。冊子体の『人文・社会編』と『科学技術編』との両方を収録。

(3) データ更新

データは3ヶ月毎に更新の予定です。年間の増加件数は約12万件。

(4) サービス開始時期

平成4年1月を目途に準備を進めています。

2. 『国会図書館科学技術欧文会議録データベース』

本データベースは、国立国会図書館が収集した、科学技術分野の主要学協会が主催する国際会議、各種シンポジウムの欧文会議録のうち、図書形態で刊行された会議録を収録したもので、冊子体では、『国立国会図書館所蔵科学技術関係欧文会議録目録 第5巻1985-1988』が刊行されています。

概要は次のとおりです。

(1) 収録対象

1985年から国立国会図書館において受入、整理完了した欧文の科学技術関係会議録の会議録のタイトル、会議名、開催地、出版社、国立国会図書館コントロール番号、請求番号、分類記号等を収録。

(2) 収録範囲、収録件数

1985年以降のデータを収録しており、現在のデータは約23,000件。

(3) データ更新

データは3ヶ月毎に更新の予定です。年間の増加件数は約2,000～3,000件。

(4) サービス開始時期

平成4年1月を目途に準備を進めています。

両データベースのサービス開始のお知らせ等は、NACSIS-IRのオンラインニュースにより行う予定です。また、データベースの内容、利用方法等について、お知りになりたい方は、サービス開始時に発行される予定の「NACSIS-IR データベースシート」をご覧ください。
(データベース課)

『経済学文献索引データベース』のサービス開始

我が国の経済学分野の雑誌論文等の索引を収録した『経済学文献索引データベース』のサービスを8月1日から開始しました。

概要は以下のとおりです。

1. 『経済学文献索引データベース』の概要

(1) 収録対象

- ① 本データベースは、従来『経済学文献季報』として、経済資料協議会から刊行されてきたものを、同協議会の協力を得てデータベース化したもので、我が国で刊行される経済学分野の雑誌等（約900誌）に掲載される論文についての索引を収録します。
- ② サービス開始当初のデータ件数は約8,000件ですが、毎年約8,000件が追加されます。また、過去のデータについて、遡及入力を行っていきます。

(2) 収録データ項目

論文の標題、著者名、掲載雑誌名、巻号、出版年、掲載頁、『経済学文献季報』の分類コード、キーワード等を収録します。

2. 利用方法

データベース呼び出しコマンド名は「KEIZAI」です。内容及び利用方法等をお知りになりたい方は、データベース毎にその内容を解説している「NACSIS-IR データベースシート（経済学文献索引データベース）」をご覧ください。データベースシートを入手されたい方は共同利用係（03-3942-6933）へ、お問い合わせください。

3. 利用料金

接続料 …………… 50円/分
ヒット料 …………… 13円/件

(なお、利用料金は合計額に3%を加算した額になります。) (データベース課)

東京大学史料編さん所『維新史料綱要データベース』 のサービス開始

学術情報センターでは、東京大学史料編さん所の協力を得て、同編さん所が作成するデータベースを NACSIS-IR を通して広く全国の大学等の研究者等に公開するための準備を進めてきましたが、このたび、そのうちの『維新史料綱要データベース』の提供を受け、NACSIS-IR によるサービスを行うこととなりました。

本データベースの概要は以下のとおりです。

1. 『維新史料綱要データベース』の概要

東京大学史料編さん所では、創設以来、古代から明治初期に至る時期の大量の古文書、古記録を集積し、これらをもとに、種々の史料集の編纂、刊行を行っています。

また、昭和59年度からは、電算機の導入により、集積された史料のデータベース化を行っており、同編さん所来所者への検索サービスを実施しています。『維新史料綱要データベース』はその中の一つです。同データベースは、『維新史料綱要』（全10巻）の網文の全文がデータベース化されたものであり、現在、全体の4割にあたる約1万6千件がデータベース化されています。

学術情報センターでは、提供されたデータを NACSIS-IR 用に編集して全国に向けてのサービスを開始いたします。なお、残りについても、同編さん所で入力中ですので、年2回追加データの提供を受け、データベースの更新を行う予定です。

(1) データベースの収録項目

本データベースは、『維新史料綱要』の網文の全文、年月日、所在巻、頁、対応する『大日本維新史料（稿本）』（『維新史料綱要』のもととなった史料）の架番号、丁数等、及び網文中から抜き出された、「人名」「官職」「地名」「事項名」の4種類のキーワードを収録しています。

(2) 収録件数等

現在のデータ件数は約1万6千件ですが、毎年約8千件のデータが追加され、最終的には約4万件のデータベースとなります。

(3) データベースの特徴

本データベースは、「人名」「官職」「地名」「事項名」の4種類のキーワード及び、年月日等をもとに網文の検索を行うことができ、『維新史料綱要』の網文の検索は勿論のこと、同書のもととなった『大日本維新史料（稿本）』の参考資料として、さらには、幕末維新政治史の基本的事実を網羅した、詳細な年表として利用することができます。

2. サービス開始時期

平成3年11月を目途に準備を進めています。サービス開始のお知らせ等は、NACSIS-IR のオンラインニュースにより行う予定です。また、本データベースの内容、利用方法等について、お知りになりたい方は、サービス開始時に発行される予定の「NACSIS-IR データベースシート」をご覧ください。
(データベース課)

『海外研究プロジェクトデータベース』の 本体データ請求サービスの一部開始

『海外研究プロジェクトデータベース』は、8か国の政府関係研究助成機関等によって進められている「EXIRPTS（研究プロジェクト情報国際交換計画）」の一環として実現したデータベースです。（学術情報センターニュース第11号に概要，第13号に使い方，第15号に本データベースの形成について説明した記事を掲載しています。）

同計画では、このデータベースの機能として、

第一段階：カタログデータ検索

各機関で、全機関のカタログデータ（研究プロジェクト名，研究代表者等の簡略な情報）を収録したデータベースを保有し，検索システムに登載し，国内のユーザにサービスを行う

第二段階：本体データ請求

上記カタログデータを検索して，必要に応じ，本体データ（研究プロジェクトの概要，予算等の詳細な情報）を，電子メールにより，該当各機関に請求し，所要の本体データを入手する

を用意し，自機関のユーザにサービスすることとして，学術情報センターでは，第一段階のサービスを平成2年5月から開始しています。

このたび，第二段階の準備ができ，電子メールによる本体データ請求の試行サービスを開始することになりましたので，お知らせいたします。

当面は，準備体制の整ったイタリアのCNR（国立研究協会）が本体データ請求の対象機関となります。イタリアCNRからの本体データ請求に対しては，学術情報センターが保有する本体データを提供します。その他の機関については，可能になった時点でオンラインニュース等でお知らせいたします。（各機関の準備の進行状況は様々です。）

1. 本体データ請求の方法（REQUEST コマンド）

『海外研究プロジェクトデータベース』を検索し，求める研究プロジェクトが見つかったら，“REQUEST”というコマンドを指定してください。該当する研究プロジェクトの一覧が表示され，実際に請求するか，再確認をする画面になりますので，“Y”（実行）または“N”（キャンセル）または“A＝ ”で自分の電子メールアドレスを指定して実行してください。

数日程度で，自分の電子メールボックスに，請求した本体データが到着するものと思われます。

REQUEST コマンド入力書式は次のとおりです。

入力書式	説明
REQUEST△[S. 集合番号][.]	<ul style="list-style-type: none"> { [ALL] → 検索対象全件請求 { C. 国名## 機関名 → 特定の国または機関のデータ請求 { I. I1[, I2, I3...] → 検索集合内のI1[, I2, I3...] のデータ請求 { I. I1-I2 → 検索集合内のI1~I2までのデータ請求 { N. n → 検索集合内のn番目までのデータ請求

△はスペース（1文字の空白）です。集合番号を省略すると直前の集合が対象となります。ALLは省略が可能です。

国名または機関名はコードで指定します。複数の指定が可能です。

実行確認画面は次のとおりです。ここでは、学術情報センターのNACSIS-MAILの電子メールアドレスを指定している例を紹介しています。（下線部が利用者の入力する部分です。）

```

TYPE IN COMMAND
 3/ REQUEST
  REQUEST

**** ( YYYY.MM.DD HH:MM ) ****
SEQ. <----- Project-ID -----> <----- Project ----->
 1 USA NSF 8812281          Planning Grant: Science and Technology
 2 GBR SERC GR/E71228      OPTICAL INFRARED AND UV ASTRONOMY AT UCL
 3 ITA CNR PR 0201003      Optical and Infrared observations of a
 4 ITA CNR PR 0216009      Astronomical Infrared and optical observ
 5 ITA CNR PR 0251001      Scientific use of the Italian telescope

*** PLEASE CHOOSE A FUNCTION ***
'Y' IS TO EXECUTE THIS COMMAND
'N' IS TO CANCEL THIS COMMAND
'A=MAIL ADDRESS' IS TO EXECUTE THIS COMMAND AND CHANGE ADDRESS

FUNCTION=>: A=Z00093@sinet.ad.jp

```

2. 注意事項

本体データ請求を行うにあたって、次のことに注意してください。

- (1) 本体データは電子メールにより送付されますので、自分の電子メールアドレスを指定する必要があります。電子メールアドレスは、NACSIS-MAILまたはSIMAILの他、JUNET、BITNETJPいずれかのものを充分確認して指定してください。正しく指定しないと、電子メールが届きません。

特に変更しない限り、一度登録すれば、それ以降は、その電子メールアドレスが有効となります。

- (2) 本体データは各国の言語で作成されており、イタリアの本体データはイタリア語となります。ただし、カタログデータは原則として、アメリカ英語（US English）となっています。（ドイツDFGはほとんどがドイツ語です。）
- (3) データ交換は電子メールを利用しますので、一度に大量の本体データ請求はできま

せん。的確な検索により、必要最小限の請求を行うよう心掛けてください。

また、相手機関からの本体データの送信にかかる時間は予測できません。数分から数時間、あるいは数日を要し、場合によっては、対応する本体データがないため、送られてこない可能性もありますので、御承知おきください。

- (4) 前述のとおり、当面イタリアの CNR のみが対象のため、これ以外の機関の本体データ請求は無効になります。

3. 利用料金

情報検索に係る料金は従来どおり、

接続料 …………… 50円/分

ヒット料 …………… 13円/件

(なお、利用料金は合計額に3%を加算した額になります。)

当面は試行サービスのため、本体データ請求の料金は無料としています。

(データベース課)

民間助成研究成果概要データベースのサービス開始

「民間助成研究成果概要データベース」は、民間等における学術研究助成団体による助成金で行われた研究成果の概要を収録したデータベースであり、文部省の科学研究費補助金による研究成果をもとに作成した「科学研究費補助金研究成果概要データベース(KAKEN)」に対応するものです。今後、収録対象団体を順次拡大していく予定です。本データベースの概要は以下のとおりです。

1. データベースの概要

(1) 収録対象団体

現在、データ提供に係る研究助成団体は「電気通信普及財団」、「東レ科学振興会」、「三菱財団」、「放送文化基金」、「総合研究開発機構」の5団体です。

(2) 収録データ項目

研究機関名、研究課題名、研究期間、代表研究者名、代表研究者所属、抄録、キーワード、助成団体名等を収録しています。

2. サービス開始時期等

平成3年11月を目途に準備を進めています。

サービス開始のお知らせは、NACSIS-IR のオンラインニュース等で行う予定です。また、データベースの内容・利用方法等については、サービス開始時に発行予定の「NACSIS-IR データベースシート(民間助成研究成果概要データベース)」を御覧下さい。

(データベース課)

「MathSci データベース」の更新

「MathSci データベース」の更新は、作成機関によるデータフォーマット変更に伴うデータ延着等のため平成2年11月分から停止しており、利用者の方々には御迷惑をおかけしていましたが、平成3年5月分までの更新を完了しましたのでお知らせします。

「MathSci データベース」の更新件数

平成2年11月～平成3年5月のデータ件数	29,354 件
更新後の全収録データ件数	約 760,000 件

(速報データ (CMP) の件数を除く)
(データベース課)

国内、国外で開催が予定されている学会の 情報を更新 (NACSIS-BBS)

日本学術会議事務局で収集している学会開催予定情報 (国内開催, 国外開催とも) を平成3年7月12日 (金) から最新のデータに更新いたしました。

更新した内容は、以下のとおりです。

- 1) 「平成3年度における学術研究団体の学術研究集会等開催予定一覧」
〔第1部～第7部〕

表示項目：・国内で開催される集会等名

- ・開催年月日
- ・開催地
- ・参加予定数
- ・集会連絡先, 電話番号
- ・その他, 特記事項, 備考

なお、データの中には未定のものもありますが、年度途中におけるデータの更新は予定されておりません。次回の更新は、来年度になります。(年1回更新)

2) 「1991年度開催学術関係国際会議一覧 第2集」

表示項目：・国際会議名

- ・開催時期
- ・開催場所
- ・連絡先
- ・予定参加者数
- ・予定参加国数

これらの項目は、日本開催、国外開催別の掲示板に掲載されており、予定年月順に掲げてあります。なお、年度途中でデータの更新を予定しています。(年2回更新)

これら情報の表示方法については、従来どおり掲示板の主題で検索できますので、目的の掲示板を選択し表示できます。利用方法は「電子メールシステム利用の手引」(平成2年10月刊)あるいはBBSの掲示板「会議開催予定一覧の利用法」を参照して下さい。

また、表示データに関する問い合わせは直接、各集会の連絡先に照会して下さい。

なお、平成2年度に提供していたこれまでの学会情報も、当分の間掲載しておりますので、必要に応じて、御利用ください。(システム管理課)

NACSIS-BBS 掲示板一覧

電子メールシステムの中で提供している「電子掲示板 (Bulletin Board System), BBS」サービスでは、各掲示板 (ボード) が階層構造を成しています。

システム上では、現在のところ、この構造を一覧する機能がないためやや使いづらくなっております。利用上の参考までに、現在のボードの階層構造を下記のとおり御案内いたしますので、座右に置いて参照してください。

なお、CUGの利用・参加については、各ボードに表示されている特定利用掲示板管理者に照会してください。

また、目的のボードに一気に移動する場合には、下記の機能を利用してください。

例：システム選択レベル (SYSTEM?が表示している時) から掲示板 FREE の下の BITNET に一気に移動する場合

下線部が入力です。

SYSTEM ?BBS FREE.BITNET あるいは、BBS に入ったあとでは、

BBS001 R コマンド[BL,G,B,T,L,W,R,DEL,-END]? T:G FREE.BITNET です。

の部分(グレー背景)が「センターニュースNO.16 (1991.6 P.46)」以降に新設された掲示板です。

NACSIS-BBS 一覧表

1991年8月14日 現在

掲示板名称 (階層構造)	内 容	下層の 掲示板数	メッセー ジ数
BBS			
├ NACSIS	学術情報センター関連情報	0	14
├ GUIDE	サービス利用案内	0	7
├ HAJIME	掲示板の練習用(使い方の質問も受けます)	0	73
├ QA	質問受付, 回答(自由利用)	0	172
├ FREE	自由利用掲示板	1	65
├ ─ BITNET	BITNET相談室	0	60
├ CUG	特定グループ利用者掲示板	13	0
├ ─ IPCC	国立大学情報処理センター協議会の電子会議	1	1
├ ─ LINK	近畿北部地区国立大学図書館実務者会議	3	0
├ ─ ELBCTLB	東京大学インビジブル・ライブラリ・コミュニティ	4	2
├ ─ TEAB	日本行動分析学会	4	1
├ ─ PASTON	パストンレターズ研究会	3	1
├ ─ JADP	日本発達心理学会フォーラム	0	0
├ ─ MAKTABA	京都大学図書館系職員のシステム関係事務連絡用	3	0
├ ─ DDJ	外国語関連フォーラム	9	1
├ ─ BBBCCJ	錯体化学フォーラム	0	0
├ ─ BBLUSR	BIBLIONユース広場	0	5
├ ─ ASIA	東洋学関連フォーラム	4	1
├ ─ CATLEC	地域記録講習会応援団	2	0
├ ─ OPALS	関数解析研究会	0	0
├ CONF	学術関係会議等開催情報 (日本学術会議提供)	8	7
├ ─ A	学術研究集会等開催予定一覧 平成2年度	8	0
├ ─ B	学術関係国際会議一覧 1990年度 第2集 (国内開催)	0	135
├ ─ C	学術関係国際会議一覧 1990年度 第2集 (国外開催)	0	385
├ ─ D	学術関係国際会議一覧 1991年度 第1集 (国内開催)	0	86
├ ─ E	学術関係国際会議一覧 1991年度 第1集 (国外開催)	0	273
├ ─ F	学術研究集会等開催予定一覧 平成3年度	8	0
├ ─ 0	主催団体名 索引	0	1126
├ ─ 1	第1部 文学、哲学、教育学、心理学、社会学、史学	301	0
├ ─ 2	第2部 法学、政治学	49	0
├ ─ 3	第3部 経済学、商学、経営学	81	0
├ ─ 4	第4部 理学	128	0
├ ─ 5	第5部 工学	136	0
├ ─ 6	第6部 農学	130	0
├ ─ 7	第7部 医学、歯学、薬学	301	0
├ ─ G	学術関係国際会議一覧 1991年度 第2集 (国内開催)	0	97
├ ─ H	学術関係国際会議一覧 1991年度 第2集 (国外開催)	0	95
├ LIB	図書館職員掲示板	4	1
├ ─ CAT	(ネコではなくて) カタログの部屋	0	153
├ ─ INF	情報コーナー	0	10
├ ─ TEA	お元気ですか(談話室)	0	239
├ ─ REF	教えてください(参考質問) コーナー	0	34

(システム管理課)

データベース概要紹介リーフレットの発行

NACSIS-IR を御利用になる際の参考資料として、データベース毎に検索のための必要な事項を簡潔に記載した案内用のリーフレット「データベースシート」を作成しました。

新たなものは、8月1日よりサービスを開始した『経済学文献索引データベース』の「データベースシート」です。

必要な方は、下記2によりお申し込み下さい。

1. 概要

(1) 形態

A4版4ページ（平均）で各データベースごとに作成しています。（但し、内容がほとんど同じになるデータベースは1つのデータベースシートにまとめています。）

(2) 記載内容

- データベース名
- データベース呼出しコマンド
- 概要説明
- 概要一覧表

収録内容	収録期間	（データベースによっては省略項目もあります。）
対象分野	データ件数	
データベース作成機関	更新頻度	
情報源	年間データ増加量	
対応誌	課金方式	

- 項目一覧（項目名、項目記号、プリフィックス、索引説明、出力モード等）
- データベース固有のコマンド
- 表示例

2. 申込方法

御希望の方は、次頁の「データベースシート申込書」に①氏名、②所属、③利用者番号④電話、⑤送付先の郵便番号、住所、氏名を記入し、⑥希望するデータベースシートに✓印を付け、郵便またはFAXでお申し込み下さい。

申込先 学術情報センター 共同利用係
住 所： 〒112 東京都文京区大塚3-29-1
FAX： 03-3814-4931

データベースシート申込書

学術情報センター
共同利用係

申込者	氏名			利用者番号		
	所属			電話		
記入欄	受付	年	月	日	発送	年 月 日

希望データベースシート申込欄にVをつけ、送付先を明記願います。

申込	コード	略称	データベース名称
	001	利用方法	データベースシートの利用にあたって
	101	LIFE	Life Sciences Collection
	102	MATH	MathSci
	103	COMPEN	COMPENDEX PLUS
	104	HBR	Harvard Business Review
	105	ISTP	ISTP & B
	106	EMBASE	EMBASE
	107	SCI	SciSearch
	108	SSCI	Social SciSearch
	109	AHCI	A & H Search
	201	KAKEN	科学研究費補助金研究成果概要データベース
	202	GAKUI	学位論文索引データベース
	203	GAKKAI	学会発表データベース第一系～第八系
	204	PAPER	学術論文データベース第一系, 第二系
	205	RES	研究者ディレクトリ
	206	LAW	現行法令データベース
	207	EXRP	海外研究プロジェクトデータベース
	208	KEIZAI	経済学文献索引データベース
	301	JPM	JPMARC
	302	LCMB	LCMARC (Books)
	303	LCMS	LCMARC (Serials)
	304	JBCAT, FBCAT	目録所在情報データベース (図書)
	305	JSCAT, FSCAT	目録所在情報データベース (雑誌)
	306	ACCAT	アメリカンセンター図書館総合目録データベース
	401	DBDR	データベースディレクトリ
備考			

「送付先」 〒 _____

(住所) _____

(氏名) _____

利用料金参照機能のサービス開始

平成3年8月1日より、情報検索サービス及び国際電子メールサービスの利用状況（料金の請求明細）を表示する機能のサービスを開始しました。利用料金の支払い時に経理責任者からの問い合わせにより利用明細の必要な方、利用状況を知りたい方は、この機能を利用することにより端末に表示することが出来ます。以下にこの機能の使い方を説明します。なお、この機能は情報検索システムで利用出来ます。

コマンド名	オペランド
CHARGE	MONTH (mm) ACCT (x)

mm：料金の請求月（4月利用分は5月請求となります。）

x：支払コード

※ オペランドは省略することができ、MONTHを省略した場合は最新の請求月、ACCTを省略した場合は現在LOGONしている支払コードとなります。なお、MONTHとACCTのオペランドを指定する場合は、空白またはカンマ「,」により区切ります。

例1（最新の請求月（7月）の状況を参照する場合）

>> CHARGE

USER-ID = A99999 (91 NEN 07 GATSU SEIKYUU BUN , SAIKEN KANRI BANGOU = 1234)

NO ACCT DATE TIME SERVICE CHARGE E-TIME OUTPUT MAIL(BYTES)

```
-----
1 A 91.06.15 14:01:31 IR GAKU1 975 13 25
2 A 91.06.16 10:15:00 IR PAPER1 543 8 11
```

** TOTAL CHARGE = 1,563 YEN (1,518*1.03)

CHARGE LIST ENDED.

>>

例2（請求月が6月のものを参照する場合）

>> CHARGE MONTH(6)

USER-ID = A99999 (91 NEN 06 GATSU SEIKYUU BUN , SAIKEN KANRI BANGOU = 0123)

NO	ACCT	DATE	TIME	SERVICE	CHARGE	E-TIME	OUTPUT	MAIL(BYTES)
1	A	91.05.02	11:22:33	IR LIFE	1,356	24	12	
2	A	91.05.24	14:15:16	IR JPM	30	50	15	

** TOTAL CHARGE = 1,427 YEN (1,386*1.03)

CHARGE LIST ENDED.

>>

表示項目の説明

- ① NO : 一連番号
- ② ACCT : 支払コード
- ③ DATE : 利用開始日付 (年月日)
- ④ TIME : 利用開始時間 (時分秒)
- ⑤ SERVICE : 利用サービス (データベース名等)
- ⑥ CHARGE : 利用料金
- ⑦ E-TIME : 経過時間 (単位は分)
- ⑧ OUTPUT : 出力量 (検索した文献等の表示件数またはFAX出力枚数)
- ⑨ MAIL(BYTES) : 国際メール送信バイト数

接続ニュース

前号以降、新たに目録所在情報サービスの参加機関となった図書館は、以下のとおりです。

(平成3年8月現在)

No.	機 関 名	接 続 日	No.	機 関 名	接 続 日
157	静岡理科大学	3. 6. 5	163	大阪府立大学	3. 7. 12
158	関西大学	3. 6. 24	164	大阪教育大学	3. 7. 24
159	聖徳大学	3. 6. 25	165	福岡工業大学	3. 8. 2
160	函館大学	3. 6. 25	166	大阪女子大学	3. 8. 5
161	放送教育開発センター	3. 7. 5	167	姫路獨協大学	3. 8. 22
162	武蔵大学	3. 7. 9			

この結果、参加機関数は、国立大学95、公立大学6、私立大学57、共同利用機関7、その他2、合計167となりました。

(共同利用係)

NACSIS-IR 利用者懇談会の実施

NACSIS-IR をより使い易く、充実したものとするため、NACSIS-IR の利用者を対象として懇談会を、下記により開催いたします。

参加を希望される方は、ファックスまたは葉書にてお申し込みください。

記

1. 趣旨

NACSIS-IR に関し、現行サービスに対する利用者の意見・希望を聞き、今後のシステム開発、運用等の改善並びに新規データベースの企画に資することとする。

2. 対象者

NACSIS-IR の利用者

3. 定員

各会場とも10名程度

4. 場所・日程

(1) 関東地区

場所 学術情報センター会議室

日時 平成3年10月30日(水) 14時～16時

(2) 関西地区

場所 大阪大学生命科学図書館

日時 平成3年11月6日(水) 14時～16時

5. 申込要領

氏名、所属、住所、電話番号、ユーザID及び参加を希望する地区を明記のうえ、下記へファックスまたは葉書でお申し込みください。なお、応募者多数の場合は、定員に達ししだい締め切らせていただきます。

(1) 申込・問合せ先

☎112 東京都文京区大塚3-29-1

学術情報センター事業部データベース課データベース管理係

TEL 03-3942-6973～4

FAX 03-3942-9398

(2) 締切

平成3年10月18日(金)

(データベース課)

NACSIS サービス Q & A (3)

I. 情報検索関係

質問 1

DDX-TP 回線を利用してセンターに接続し、日本語のデータベースを利用したところ、図1のように、行の途中で折り返してしまい、折り返した部分が文字化けしています。どのようにすると正しく表示できるでしょうか。なお、英語のデータベースでは発生しませんでした。

```

ACCN : 1000367
NAME : 科学研究費補助金研究成果概要データベース
PROD : 学術情報センター
CONT : 文部省の科学研究費補助金により行われた研究の研究
仕称梁斯  ← 途中で折り返す
          ベース。昭和61年度補助分より、奨励研究を除く全件について収 ←
陪戲羈
  
```

(下線部分が文字化けの部分)

図1 DDX-TP 回線利用時の文字化け

学術情報センターがサービスしている日本語のデータベースは、1行に英数字などの半角文字と漢字などの全角文字が混在しています。半角文字と全角文字との間には文字の切替えを判断するための「漢字開始コード」および「漢字終了コード」(図2参照)が存在しています(端末には表示されません)。DDX-TPの場合、1行あたりの文字数はNTTにあるバケット交換機の設定により決定していますが、これが80字となっている場合、漢字開始および終了コードを含めて80字目で行がえするため、上記のように行の途中で折り返してしまふ現象が発生します。また、折り返した部分が化けてしまうのは、80字目に全角文字が存在していた場合です。したがって、一行あたりの文字数のパラメータを無制限に変更すれば正しく表示できます。その手順は以下のとおりです。

(1) DDX-TP ID方式の場合

DDX-TPの利用申請を行ったときに登録したパラメータの組合せ(標準プロフィールといいます)は、ユーザー側では変更できません。NTTに変更を申請し、標準プロフィール番号を26または34に変更してください。

(2) DDX-TP パスワード方式の場合

この方式では、回線へ接続するとき、ユーザーが「手順番号」を指定することにより接続手順を変更できます。この場合、手順番号“021”(標準プロフィール番号26が選択されます)を指定してください。

また、英語のデータベースには「漢字開始コード」等が存在しないため、この現象は発生しません。

```

「漢字開始コード」 「漢字終了コード」
      ↓                ↓
PROD : 始 学術情報 終 センター
  
```

図2 漢字開始および終了コードの存在位置

質問2

検索結果の表示が大量になったので表示を終わらせたい場合など、進行中の処理を打ち切るにはどうしたらよいのでしょうか。なお、パソコンを端末として使用し、公衆電話回線から利用しています。

進行中の処理を打ち切るには、ホストコンピュータに割り込み信号（BREAK信号）を送出することによりユーザコマンドの受付モードとなったところで必要な指示（END等）を与えていただきます。割り込み信号（BREAK信号）の送出は、端末の割り込み信号を送信するキー（例：割込キー、BREAKキー、PFキー等）を使用します。この時の流れを図3に示します。

なお、この割り込み信号（BREAK信号）の送信方法は、パソコンの場合、ご使用の通信ソフトにより異なります。通信ソフトのマニュアル等で確認してください。

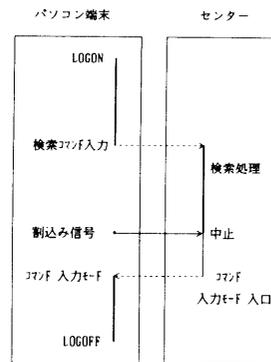


図3 割り込み処理

質問3

端末を操作中に回線が切れたようなので再度 LOGON したところ、次の様なメッセージが表示され LOGON できませんでしたこの場合どうしたらよいのでしょうか。

```
JET100351 USERID XXXXXX ALREADY USED LOGON REQUEST REJECTED
JET10010A ENTER 'LOGON' OR 'LOGOFF' COMMAND
```

このメッセージは、操作中に回線などが切れた場合、会話不能になるが情報検索の T S Sセッションが残っているために出力されるものです。この場合には、残っているセッションに再度接続しなおす必要がありますので、再 LOGON 時に次の様に入力して下さい。

LOGON XXXXXX / パスワード, R

(R : RECONNECT の略)

これにより、端末は切れる前の状態に戻りますので操作を継続又は終了して下さい。この時の処理の流れを図4に示します。

またパソコン等でオートログオン機能を使用している方は、RECONNECT (リコネクト) オペランドを入力できるようにマニュアルでのログオン手順を予め用意しておくことをおすすめします。なお、この例の様に回線が切れた時などにはセンター側では処理待ち状態となっていますので、そのままにせず必ずリコネクト処理をして正常に終了させて下さい。

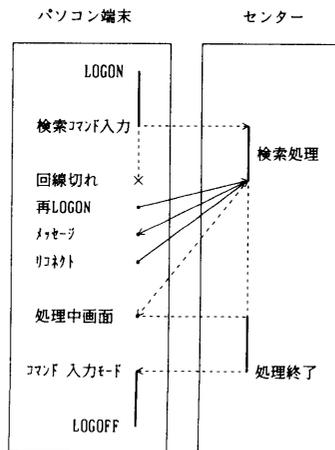


図4 リコネクト処理

II. 学術情報ネットワークの関係

要望 1

学術情報ネットワークパケット交換網のノードを広範囲にわたって、数多く設置してほしい。

昭和61年度から平成3年度にわたり行われてきた6年間のパケット幹線網整備計画は、今年度横浜国立大学に28番目のノードを設置することにより終了いたします。この結果、大半の大学から120km以内にノードを設置するという目標が実現いたします。また、関東、関西等大学等が比較的多く存在する地区には、ノード機関の負担分散の意味から既に複数のノードを設置しております。

要望 2

学術情報ネットワークパケット交換網の高速化を図ってほしい。

これまでもノード及び接続機関の増ならびに通信トラフィックの増加に応じて幹線の回線速度の見直しを行ってきました。

また、端末側の速度は、現在使用しているパケット交換機が64kbpsを越える速度をサポートしていないので64kbpsが上限です。なお、構内線で接続をする場合48kbpsまでの接続しかできない場合がありますので、学術情報センターまでお問い合わせください。

要望 3

学術情報ネットワークパケット交換網への電話による接続が可能なアクセスポイントの設置場所を拡大してほしい。

現在、アクセスポイントは全国7カ所に設置しており、それぞれ2回線を整備しています。今後は、これらのアクセスポイントの利用予測を勘案して、整備・拡大を考慮していくこととしています。ただし、ノード機関以外の大学等に学術情報センターがアクセスポイントを整備することは考えておりません。

要望 4

パケット交換網において、接続されているノード機器等が障害でも影響を受けないようなネットワークにしてほしい。

当センターでは、学術情報ネットワークの円滑な運転、信頼性の確保、障害時間の短縮のために、当センター内に監視装置を設置し、ネットワークの監視を行い障害の早期発見、対策を行っています。また、ノード装置も可能な限り二重化に努め、安全対策を考慮しています。さらに、安定的運転を求める場合には、中継回線の二重化や、バックアップ装置の設置、バックアップ電源の確保などが考えられますが、多大な経費を必要とするため、実現不可能な状況です。

要望5

学術情報ネットワークの保守点検等による停止期間を極力短く、また、需要の少ない時期にしてほしい。

学術情報センターは、学術情報ネットワークの運用停止を極力無くすように努めています。しかし、学術情報ネットワークの安定な運用を図るためには、学術情報センターを含む全国のノード設置機器の定期的な保守（年2回：3月と9月、4時間／回）が必要不可欠です。このほか、利用機関等の増加に対応するため、ノード設置機器の増強作業に伴う運用停止が年1回（6月、4時間）、年末には同様の増強作業とトラフィックの増加のための回線構成の見直し作業による停止（5日間程度）も最小限必要です。

また、学術情報センターは、これらの作業のための停止を可能な限り計画的に行ない、事前に利用機関に連絡することにより、停止による影響を最小限に止めるようにしております。なお、学術情報ネットワークの突発的な障害発生については、迅速な対応により短時間での修復が可能となるよう最善の努力を払っているところです。

このような事情を御理解のうえ、学術情報ネットワークの最小限の停止に関して御了解いただくようお願いいたします。

要望6

学術情報ネットワークへの加入に関して、接続容量を余裕をもって確保してほしい。

学術情報センターは、学術情報ネットワークへの加入に関して、各ノード機関に対して構内線の確保等を事前にお願ひしてあります。また、学術情報センターとしてもノード機器（パケット多重化装置）の接続端子を増強できますので加入に関して接続容量が不足することはありません。なお、加入申請はできる限り早期にお出しいただくようお願いいたします。

要望7

学術情報ネットワークの加入にかかる事務処理を速くしてほしい。

学術情報センターは、加入申請書の受理から加入承認書が交付されるまでに①申請書類の内容確認、②接続ノードの選定、③加入者番号の付番、④ノードに用意する接続に必要な機器の確認、⑤申請事項承認のための所内決裁等の作業を行なうこととなります。これらの手続きに郵便関係の処理時間等が加わりますので、3、4週間程度の期間を要することとなります。また、この後、加入者から接続届けの提出を受けてからノード機関への連絡等を経て接続作業に入ることとなりますので、加入申請書を提出してから接続が完了するまで3カ月程度の期間を要します。

また、この他に申請内容に関する申請者との連絡調整が発生する場合等にはさらに期間を必要としますので御了承ください。

Ⅲ. 国内電子メール関係

質問 1

“アップロード”とはどのような機能ですか。

アップロードとは、端末（パソコン等）のキーボードからリアルタイムで入力する代わりに、パソコンで事前に作成しておいたファイル（文章）の内容を一括して自動的に送り出す機能で、通信ソフトで持っている機能です。

メールで送る長い文章などは事前にパソコンでワープロやエディタを使って文章を作成し、ファイルに保存しておき、アップロードの機能を使って一気に送信すれば、通信にかかる電話代等の回線使用料も少額ですむという利点があります。また、回線使用料を気にせずに文章を推敲できますし、文書形式の整形にも向いています。これに対して、ホストコンピュータ側から BBS 等のメッセージを手元のパソコン等にコピーする機能を“ダウンロード”と言います。

質問 2

パソコン等の通信端末から通信ソフトを使ってファイルをアップロードする方法を教えてください。

アップロードの機能は通信ソフトが持っている機能です。このため、利用している通信ソフトにより操作方法が異なります。ここでは、「まいとーく」を例にして説明します。詳しくは、それぞれの通信ソフトのマニュアルをご覧ください。

(1) アップロードするための環境設定

この環境設定は、1度設定し、保存しておけば以降設定しなおす必要はありません。通信パラメータの設定の画面で、次の内容を設定します。

（アップロードに関係する部分）

- ・ファイル送信（行）の3番の文字列を選択し、内容に「[^]J」を設定します。
- ・HELP キーを押し、センターリストに登録し保存しておきます。

(2) アップロードの方法

通信画面中から、アップロードする場合は、HELP キーを押し、ファイル送信を選択する。続いてファイル名（送信する文書の入ったファイルの名前）を指定すると自動的にアップロードが開始され、さらに、アップロードが終了すると通信画面にもどります。

質問 3

電子メールでアップロードするときは、必ず電子メールシステムのエディタを使用しなければいけないのですか。メール本文のところでアップロードできませんか。

電子メールサービスの入力を受け付けるところ（画面に、プロンプトが出力されている状態）であれば、いつでもアップロードできます。アップロードに当って、電子メールシステム内のエディタ（TEXTなど）を利用する必要はありません。

質問 4

プログラム等のバイナリーデータをアップロードできますか。

電子メールで利用できるアップロードは、端末からキーボード入力の代わりにファイルから送信する機能ですから、バイナリーデータをアップロードすることはできません。学術情報センターでは、制御手順付のアップロード環境 (XMODEM等) を提供しておりませんので、バイナリーデータ等の制御コードが含まれるデータの場合は、バイナリーデータを文字コード化して (フリーウェアの ISH 等で変換して下さい。) 利用する必要があります。

IV. 国際電子メール関係

質問 1

海外へメールを出したときに、ヘッダの From フィールドにはどのようなアドレスが付けられて相手に送られるのでしょうか？

国際電子メールでは、BITNET と CSNET に接続しております。

BITNET に対しては、From : uid@jpnac. bitnet

CSNET に対しては、From : uid@sinet. ad. jp

(uid : 利用者番号)

以上の 2 つのメールアドレスの形式で相手に送られます。

質問 2

海外へ日本語でメールを送信したいのですが、日本語は送れますか？

現在、NACSIS-MAIL, SIMAIL では JIS 漢字コード ((X0208-1983 (通称: JIS83)) を標準とした転送コードを使用しています。したがって、受信相手のシステムでこれを解釈できる場合には、日本語 (2 バイト文字) のメールを転送できます。しかし、相手のシステムで JIS 漢字コードが扱えるかどうか不明の場合は、英文字 (1 バイト文字) で送信の方が安心です。

なお、1 バイト文字の場合でも、ASCII コードや JIS コードは可能ですが、その他のコードは、受信相手のシステムが解釈できるかわかりません。

NACSIS-IR システム・データベース収納状況

平成3年8月10日現在

No.	データベース名称	収納件数	収録期間
1	Life Sciences Collection	955,841	1982年1月～
2	MathSci	728,295	1973年1月～
3	COMPENDEX PLUS	2,237,048	1976年1月～
4	Harvard Business Review	2,511	1927年1月～
5	ISTP & B	1,623,805	1982年1月～
6	EMBASE	2,085,196	1984年4月～
7	SciSearch	3,067,319	1987年4月～
8	Social SciSearch	532,314	1987年4月～
9	A & H Search	478,392	1987年4月～
10	科学研究費補助金 研究成果概要データベース	57,146	昭和60年度～
11	学位論文索引データベース	49,570	昭和59年度～
12	学会発表データベース第一系 (電気・情報・制御関連)	50,934	昭和62年度～
13	学会発表データベース第二系 (化学関連)	13,048	昭和63年度～
14	学会発表データベース第三系 (建築・土木・造園関連)	4,371	平成2年度～
15	学会発表データベース第四系 (生物学・農学関連)	729	平成2年度～
16	学会発表データベース第七系 (医学関連)	344	平成2年度～
17	学術論文データベース第一系 (全文) (電子関連) (抄録)	156 887	平成元年度～
18	学術論文データベース第二系 (化学関連)	4,197	昭和58年1月～
19	研究者ディレクトリ	130,109	昭和63年5月現在
20	現行法令データベース	3,563	平成3年3月末現在
21	海外研究プロジェクト データベース	45,698	
22	経済学文献索引データベース	7,932	平成2年度～
23	JPMARC	1,024,875	1969年1月～
24	LCMARC (Books)	3,036,654	1968年1月～
25	LCMARC (Serials)	502,556	1973年1月～
26	目録所在情報データベース (和図書)	534,003 3,190,248	
27	目録所在情報データベース (洋図書)	1,088,357 2,245,227	
28	目録所在情報データベース (和雑誌)	65,068 1,434,459	
29	目録所在情報データベース (洋雑誌)	109,280 885,522	
30	アメリカン・センター図書館 総合目録データベース	6,320	
31	データベース・ディレクトリ	1,027	平成2年4月現在

(注) No.26～29のデータベースの上段は書誌件数、下段は所蔵件数。

(システム業務係)

NACSIS-CAT データベース構築状況

平成3年8月8日現在

データベース名称		収納件数	備考(収録期間等)	
総合目録データベース	和 図 書	書 誌	534,641	
		所 蔵	3,195,051	
	洋 図 書	書 誌	673,373	
		書誌(遡及)	415,806	
		所 蔵	2,248,717	
	和 雑 誌	書 誌	71,090	
		所 蔵	1,454,608	
	洋 雑 誌	書 誌	109,931	
		所 蔵	889,848	
	著 者 名 典 拠		490,730	
	統 一 書 名 典 拠		1,170	
	和 雑 誌 変 遷 マ ッ プ		8,182	
洋 雑 誌 変 遷 マ ッ プ		12,843		
参照ファイル	LC/MARC	洋 図 書 書 誌	3,644,299	1968年1月～1991年6月
		洋 雑 誌 書 誌	502,556	1973年1月～1991年7月
		非 文 字 書 誌	150,129	1973年1月～1991年3月
		洋 書 著 者 名 典 拠	2,323,133	1977年1月～1991年7月
		洋 書 統 一 書 名 典 拠	13,171	1977年1月～1991年7月
	JP/MARC	和 図 書 書 誌	1,028,934	1969年1月～1991年7月
		和 雑 誌 書 誌	77,378	1968年8月～1990年4月
		和 書 著 者 名 典 拠	26,288	
	UK/MARC	洋 図 書 書 誌	1,179,832	1950年1月～1991年7月
	TRC/MARC	和 図 書 書 誌	245,597	1985年4月～1991年8月
	GPO/MARC	洋 図 書 書 誌	281,068	1976年1月～1990年12月

(システム業務係)

研修事業前半期を終えて

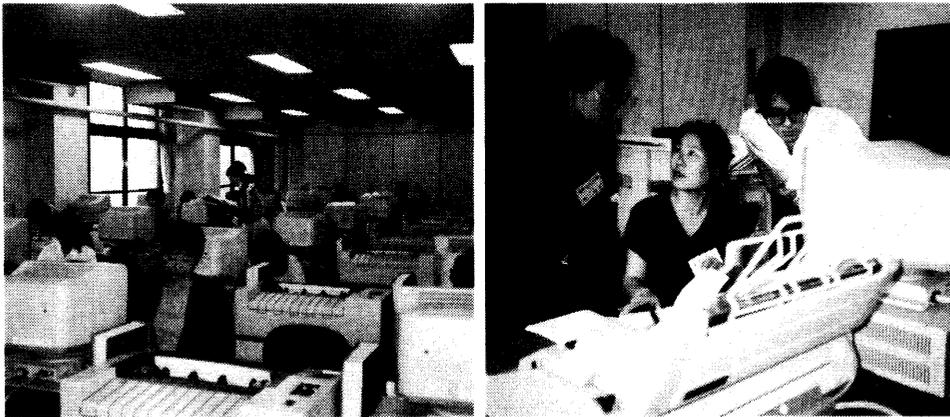
受講者アンケートより

目録システム講習会は、9月末で既に4回を実施し100名が修了しました。また同地域講習会は東京工業大学附属図書館での開催を皮切りに9月末現在13大学において実施され150名が修了しました。この講習会の他に、NACSIS-IR講習を7月19日に開催し、定員25名に対し、第1回講習には113機関より144名にのぼる多数の受講申込みがあったため、急遽追加講習を8月20日に実施し計50名が受講しました。

受講後のアンケートにより、「講習会」「講習」に関する意見や、センターに対する貴重な意見をお寄せ頂きましたのでそのいくつかを掲載します。

【目録講習会】

- 受講者のレベル別、担当資料別（図書・雑誌・視聴覚資料等）講習会の開催を希望する
- システムを利用するにあたって、どのマニュアルを参照すればよいか分かりづらい
- 雑誌についての時間が短い
- レビューが大変参考になった
- 前方のディスプレイが見にくい
- 実習の時間が長くあり良かったが、個人で作成した書誌が果たして正しいのかどうか確認できないのが不安であった
- 初日の懇親会で他大学の人達やセンター職員と交流・情報交換できたのがよかった



<目録講習会風景>

【地域講習会】

- OHPの使用、豊富な資料、丁寧な指導でとてもわかりやすかった
- NCからローカルシステムへの取込みの実際について聞けたのは有益であった
- 自分の職場で受講できる物質的・精神的メリットは大きい
- (講師の)準備がさぞかし大変だったろうと推測され頭が下がる



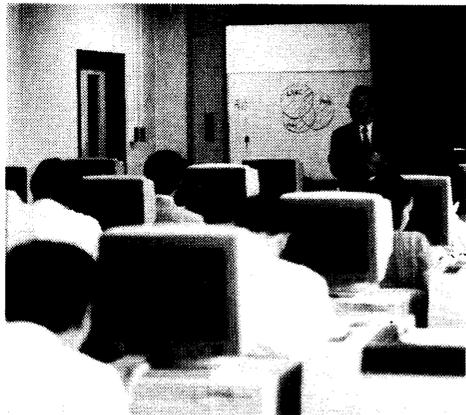
<東京工業大学地域講習会風景>

(講師担当者から)

- どの程度まで説明したらいいのか、どこが要点なのかを、きちんと把握できるような講師用テキストがほしかった
- 全般的に NACSIS からの SUGGESTION が少なく、今までの地域講習会で蓄えられた様々なノウハウを提供して欲しかった
- 受講者の中での目録実務担当者の比率が年々下がってきており、実習時に目録記述法で時間をとられた受講者もみうけられた
- 今後もテキストには常に手をいれてよりよいものにしてほしい
- 教育用ファイルのデータ件数をもう少し多くしてほしい
- 木曜日の午後にオンラインが使えたのは極めて有効だった
- 「参加組織名」と「配置コード」に関して(受講者が)理解しにくいように思われた
- 各大学のデータ入力状況が把握でき、また、新しい発見もあり有益であった

【NACSIS-IR 講習】

- 演習時間をもう少し長くしてほしい
 - 操作手順に慣れないと検索は難しいと思う
 - 検索課題を少し身近なものにして欲しい
 - 個々のDBの検索講習を開催して欲しい
 - 今後このような研修の機会を多く作っていただきたい
 - 講習は誰でも参加出来るように各地で開いてもらいたい
 - 操作方法の詳しいビデオを作成して欲しい
- 以上のように今後の教育・研修事業に参考



<NACSIS-IR 講習風景>

となる御意見、御希望を多数頂きました。また、特に、第4回目録システム講習会においては、韓国梨花女子大学校図書館より金光子整理課長及び朴文子参考室長の2名が受講され、修了したことは特記すべき事柄となりました。(研修係)

平成3年度学術情報センター・シンポジウム 開催のお知らせ

平成3年度学術情報センター・シンポジウムを以下のとおり開催します。

なお、演題については変更することもあります。詳細につきましては、別途関係各機関長宛に文書でお知らせします。

1. テーマ：NACSIS事業の新たな展開へ向けて

講演

- ・「資源共有とILLシステム」
- ・「ILLシステムへの期待と要望」
- ・「NACSISの国際展開：現状と展望」
- ・その他

パネル討論

- ・「学術情報センターに期待するもの」

2. 会場及び日時

東京会場

日 時 平成3年11月14日（木） 10:00～17:00

場 所 日本学術会議講堂（定員330名）（別図参照）

大阪会場

日 時 平成4年2月28日（金） 10:00～17:00

場 所 建設交流館8Fグリーンホール（定員300名）（別図参照）

3. 参加要領

参加希望の方は、葉書又はFAXに①氏名、②所属・勤務先（住所、電話番号）、③職名、④参加希望会場名を記入の上、当センター研修係までお申してください。

- ・申込先及び問い合わせ先

〒112 文京区大塚3-29-1

学術情報センター管理部共同利用課研修係シンポジウム担当宛

☎03-3942-6935, 6936（直）

FAX03-3814-4931

4. 申込締切日

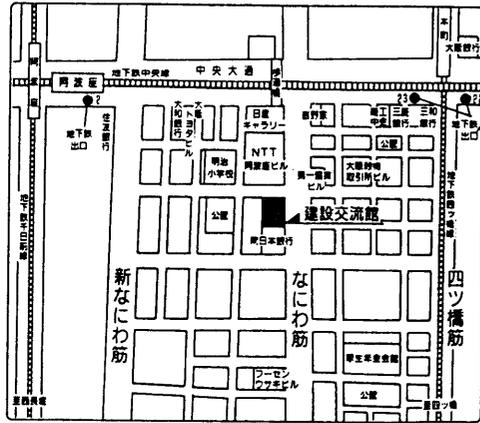
東京会場 平成3年11月1日（金）

大阪会場 平成4年2月14日（金）

学術情報センター・シンポジウム会場案内

東京会場

大阪会場



日本学術会議講堂

建設交流館

〒106 港区六本木7-22-34

〒550 大阪市西区立売堀2-1-2

☎ 03-3403-6291

☎ 06-543-2551

地下鉄千代田線「乃木坂駅」より徒歩1分

地下鉄 本町駅より徒歩5分,

阿波座駅より徒歩5分

* 両会場とも、駐車スペースがありませんので車での来場は御遠慮ください。(研修係)

第11回「東アジア文字データの国際交換に関する 実証研究公開講演会」の開催

学術情報センターの国際共同研究の一環として、平成元年度から3年計画で行ってきた「東アジア文字データの国際交換に関する実証研究」の最終公開講演会を以下のとおり行います。

日時 平成 4年 1月29日 (水)

場所 未定(東京都内での開催を予定)

内容 中国、韓国からの招へい者による各国の学術情報・書誌情報に関する報告。

詳細については、別途文書でご案内いたします。

平成3年度前期会議等報告

平成3年度運営協議委員会

平成3年度前期の学術情報センター運営協議委員会は1回開催し、次のような審議・報告を行った。

1. 第14回（平成3年6月19日）於：東京国立博物館小講堂

議 事

1. 名誉教授選考規程の制定について
2. 教官の人事について
3. 平成2年度委員会活動報告について
4. 平成2年度事業状況報告について
5. 平成3年度事業計画について
6. 平成3年度の共同研究について
7. 平成4年度概算要求について

平成3年度評議員会

平成3年度前期の学術情報センター第12回評議員会は次のような議事について持回り審議を行った。

1. 第12回（持回り：平成3年6月21日～7月8日）

議 事

1. 学術情報センター名誉教授選考規程の制定について
2. 平成3年度事業計画について
3. 平成4年度概算要求について

平成3年度第1回総合目録委員会

平成3年度第1回総合目録委員会（委員長：井上如学術情報センター研究主幹）が、平成3年5月16日（木）に開催された。

まず、報告事項として、目録所在情報サービス運用状況、平成3年度システム機能強化事項、教育・研修事業について報告があった。次いで、審議事項に入り、(1) ILL システムの参加機関の範囲について、(2) 国立大学図書館協議会「ILL システムリポート」への回答について、の2点の審議がなされた。審議の結果、(1)については、原案どおり、①大学・短期大学・高等専門学校等の図書館等、②大学共同利用機関の図書室等、③文部省所轄機関・文化庁附属機関の図書室等、④目録所在情報データベースの形成に参加している図書館等、及び⑤所長が特に適当と認める図書館等を参加機関の範囲とし、定常的に ILL 業務を行い、機関として受付館となることを条件とすることで承認された。今後は、利用規則の制定、運営会議での審議等を経て決定することになった。(2)については、原案どおり承認された上で、今後の広報活動として、各協議会総会での説明、地域説明会、実務担当者への講習会等を広く実施してほしいとの要望があった。

平成3年度第1回紀要編集委員会

平成3年度第1回紀要編集委員会（委員長：山田学術情報センター研究開発部長）が平成3年6月24日（月）に開催された。

委員長の挨拶の後、刊行スケジュール案が承認され、続いて論文の原稿が紹介され査読分担が行なわれた。

その他、紀要掲載論文の著作権について審議されたが、次回に持ち越しとなった。

学術情報センター「私立大学図書館協会総大会・研究会関連展示会」に出展

去る、7月31日（水）から8月2日（金）までの3日間、早稲田大学・総合学術情報センターにおいて私立大学図書館協会総大会・研究会が行われたが、それに伴う関連展示会が7月31日（水）・8月1日（木）の両日にわたり開催された。学術情報センターも、センター事業の紹介と利用の促進を図るため、この出展に参加し学術雑誌総合目録 CD-ROM 版の実演、目録所在情報サービス（NACSIS-CAT）の実演、情報検索サービス（NACSIS-IR）の実演、電子メール（NACSIS-MAIL）／電子掲示板（NACSIS-BBS）サービスの実演等を行った。



また、2日目には平成4年度からサービスを開始する図書館間相互貸借システム（NACSIS-ILL）のテスト版の実演も行った。これら、学術情報センターサービスに対する私立大学図書館関係者の関心は高く、多くの総大会出席者がセンターのブースを訪れ熱心に説明に耳を傾けていた。

また、出展業者の学術情報センターの諸システムへの関心も高く、多くの質問が寄せられた。学術情報センターに寄せられる期待が非常に大きいことを改めて強く感じさせられた2日間であった。今後、より多くの私立大学図書館が目録所在情報サービス及び ILL システムへ参加されるとともに、情報検索サービス等の諸サービスが一層利用されることを期待したい。

人 事 異 動

発令年月日	氏 名	異 動 内 容	旧 官 職 等
		(採 用)	
3. 5. 1	織田 康信	事業部システム管理課 (転 入)	
3. 9. 16	二宮 徹平	管理部総務課人事係長 (所内異動)	東京大学生産技術研究所 総務課人事掛主任
3. 7. 1	山田 尚勇	研究開発部システム研究系 システム工学研究部門	研究開発部学術情報研究系 情報管理学研究部門
〃	原 正一郎	研究開発部学術情報研究系 データベース研究部門	研究開発部学術情報研究系 情報図書館学研究部門
〃	計 宇生	研究開発部システム研究系 ネットワーク工学研究部門	研究開発部システム研究系 ソフトウェア工学研究部門
3. 7. 16	衛藤 直樹	管理部会計課	事業部データベース課
3. 9. 1	新屋 克明	管理部総務課庶務係長 (転 出)	管理部総務課人事係長
3. 9. 1	原 正一郎	国文学研究資料館 研究情報部助教授 (併 任)	研究開発部 学術情報研究系助手
3. 7. 1	藤田 常	文部省学術国際局学術情報課 (退 職)	管理部会計課
3. 8. 31	福島 玉男	退職	管理部総務課庶務係長

学術情報センター日誌

[平成3年5月21日～平成3年8月14日]

5. 27	ペンシルバニア大学Farber教授来訪	6. 19	学術情報センター創立5周年記念講演会(東京国立博物館)
6. 12	文部省学術課長他来訪	6. 20	評議員会懇談会
6. 14	ボローニャ大学 Ronald Dore氏来訪	6. 21	中国・南京大学文献情報学科朱慶華氏来訪
〃	ピッツバーク大学野口幸生氏来訪	6. 24	紀要編集委員会
〃	韓国学術振興財団学術資料部長 Yong-sung Kim 氏来訪	6. 24～27	第2回目録システム講習会
6. 17	MIT Buger教授来訪	7. 1	メインシステム入札
6. 19	第14回運営協議員会		

- | | | |
|---------|--------------------------------|--|
| 7.1 | 英国図書館研究開発部長 Brian J. Perry 氏来訪 | 修生一行来訪 |
| 7.1 ~ 5 | ソウル大学計算機科学科SY Han 氏一行来訪 | 7.30 インターネットワーク研究会／インターネット・バックボーン運用連絡会 |
| | 韓国梨花女子大学 SD Choi氏来訪 | 7.31 私立大学図書館協会・総大会関連展示会出展 |
| 7.4 | アムステルダム大学Cuilenburg氏一行来訪 | 〃 アトラス・インターナショナルBill Mooney氏一行来訪 |
| 7.17 | 米国国立科学財団Karl Willembrock 氏他来訪 | 8.5 ~8.8 第4回目録システム講習会 |
| 7.19 | 第1回NACSIS-IR講習 | 8.5 ~8.9 韓国梨花女子大学図書館 Kwang Ja Kim氏他来訪 |
| 7.22~25 | 第3回目録システム講習会 | 8.5 オックスフォード大学ボードリアン図書館Izumi K. Tytler氏来訪 |
| 7.23~26 | 韓国産業技術院Chang Kyo-Lee 氏一行来訪 | 8.6 マンスフィールド太平洋問題研究センター所長 Tovan La Dier氏来訪 |
| 7.24 | 文部省情報処理室橋本室長一行来訪 | 8.8 インドネシア科学院Zurniaty Nasrul 氏来訪 |
| 〃 | 東アジア文字DB講演会 | |
| 7.25 | 韓国公州大学Soeb Hyeon Kyu氏一行来訪 | |
| 7.26 | 国際協力事業団沖縄国際センター研 | |

海外渡航一覧

- | | | | |
|----------|--------------------|------------|------------------|
| 4.2 ~7 | 猪瀬所長(フランス) | 5.25~6.2 | 宮澤教授(デンマーク) |
| 5.5 ~12 | 山田教授(中華民国) | 5.25~6.5 | 内藤教授(デンマーク・ベルギー) |
| 5.11~26 | 安達助教授(フランス・英国) | 6.16~26 | 浅野教授(デンマーク・英国) |
| 5.11~25 | 橋爪教授(フランス・英国) | 6.25~4.4.2 | 高須助手(米国) |
| 5.11~25 | 根岸教授(フランス・英国) | 4.6 ~20 | 井上教授(中国) |
| 5.19~26 | 由良データベース課課長補佐(カナダ) | 8.7 ~11 | 浅野教授(米国) |
| 5.19~30 | 山田教授(カナダ・米国) | 8.12~24 | 飯田助教授(オーストリア) |
| 5.20~6.2 | 浅野教授(フランス) | | |

学術情報センターニュース (第17号)

1991年9月30日発行

発行人 猪瀬 博

発行 学術情報センター 東京都文京区大塚3丁目29番地1号 (〒112)

電話 (03)3942-6937 (直通) 情報・資料係

メインシステム機種更新作業に伴うサービス休止の予定

本センターのメインシステムは、昭和63年度に現機種（HITAC M684H および M682H）に更新し、目録所在情報および情報検索サービスを運用しておりますが、利用者の増加とデータベース容量の増加に対処するために新しい機種（HITAC M880/420 および 880/210）に更新して、平成4年1月より、新機種でサービスを再開することとなりました。更新作業は作業量が膨大なため、従来の年末年始の目録所在情報および情報検索サービス休止期間を以下のとおり延長して実施する予定です。ユーザーの皆様には大変ご迷惑をおかけいたしますが、御協力よろしくお願い致します。

サービス休止期間 : 平成3年12月16日（月）～ 平成4年1月6日（月）

この期間、以下の業務を休止致します。

- (1) 目録所在情報サービス（CAT）
- (2) 情報検索サービス（IR）
- (3) 総合目録データベース個別版、定期版の提供
（定期版は、12月11日が最終送付、1月8日から再開する予定です。）
- (4) 拡張文字フォント移植

このことにより、オンラインでの目録データの入力計画や、個別版、定期版の利用による業務を予定している機関にあっては、特に御留意下さい。

学術情報ネットワークの拡充整備とこれに伴う運用休止について

1. 学術情報ネットワークの拡充整備

学術情報センターは「学術情報ネットワーク」として、パケット交換網及びインターネット・バックボーン（平成3年12月試行運用開始予定）を提供しています。パケット交換網は、平成3年度において、ノード整備の最終年度として横浜国立大学にネットワーク通信機器（PMX, MUX等）を設置して、学術情報ネットワークパケット交換網の拡張を行い、平成4年1月から新たな構成で運用を開始します。

2. 年末のサービス停止

このような新規ノードの設置ならびに網構成の変更に伴い、下記期間中は学術情報ネットワーク（パケット交換網及びインターネット・バックボーン）の運用を休止させていただきますので御了承いただきたくお願い致します。

運用休止期間

平成3年12月22日（日）午前9時 ～ 12月27日（金）午前9時

なお、上記の期間中でも作業の内容により、一部の区間で利用可能なことがありますが、作業期間中であるため、利用の途中で利用できなくなることもありますので、御承知おきください。

年末年始のサービス・スケジュール

年末年始の各サービス・スケジュールは、以下のとおりです。システムの拡充整備および更新作業のため、一部のサービスでは、例年より長期間のサービス休止予定となっております。何卒、ご了承ください。

区 分		学術情報ネットワーク ネット交換網/インターネット	NACSIS/CAT NACSIS/IR	NACSIS/MAIL, BBS , 国際電子メール		
				学術情報 ネットワーク経由	DDX-P, TP 電話回線経由	
1991年	12月13日 (金)	通常通り	システム 更新作業 のため、 サービス 休止	通常通り	通常通り	
	14日 (土)					
	15日 (日)					
	16日 (月)					
	17日 (火)					
	18日 (水)					
	19日 (木)					
	20日 (金)					
	21日 (土)					
	22日 (日)	AM 9:00~	システム 更新作業 のため、 サービス 休止	通常通り	通常通り	通常通り
	23日 (月)	拡充整備に伴う 運用休止				
	24日 (火)					
	25日 (水)					
	26日 (木)					
	27日 (金)	~AM 9:00				
	28日 (土)					
	29日 (日)	通常通り	システム 更新作業 のため、 サービス 休止	通常通り	通常通り	通常通り
30日 (月)						
31日 (火)						
1992年	1月1日 (水)	通常通り	システム 更新作業 のため、 サービス 休止	通常通り	通常通り	
	2日 (木)					
	3日 (金)					
	4日 (土)					
	5日 (日)					
	6日 (月)					
	7日 (火)					